

279.5
176



0052670-000

279.5-176

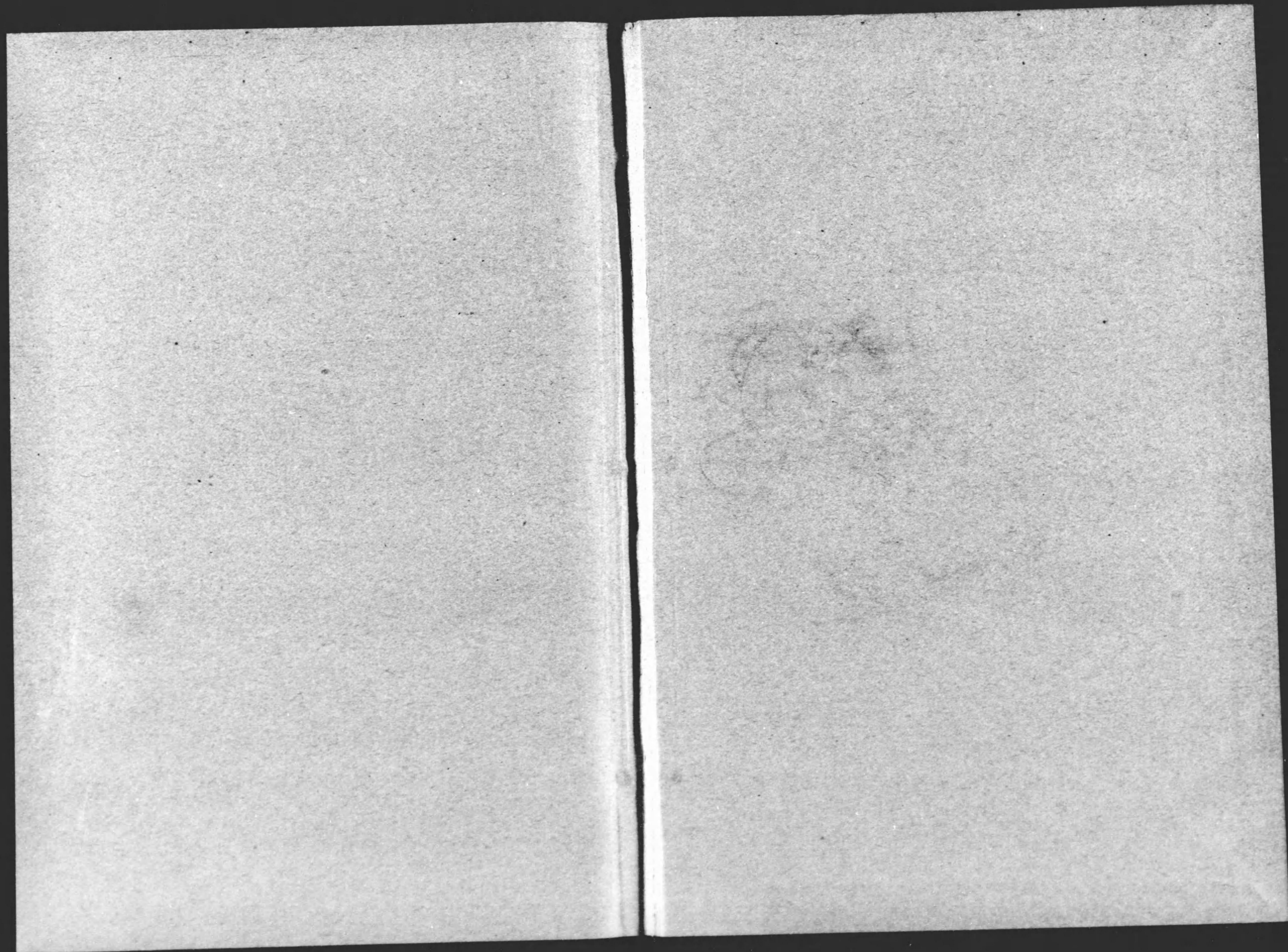
勤労に輝く青年団

大日本青年団指導部農漁課・編

日本青年館

昭15

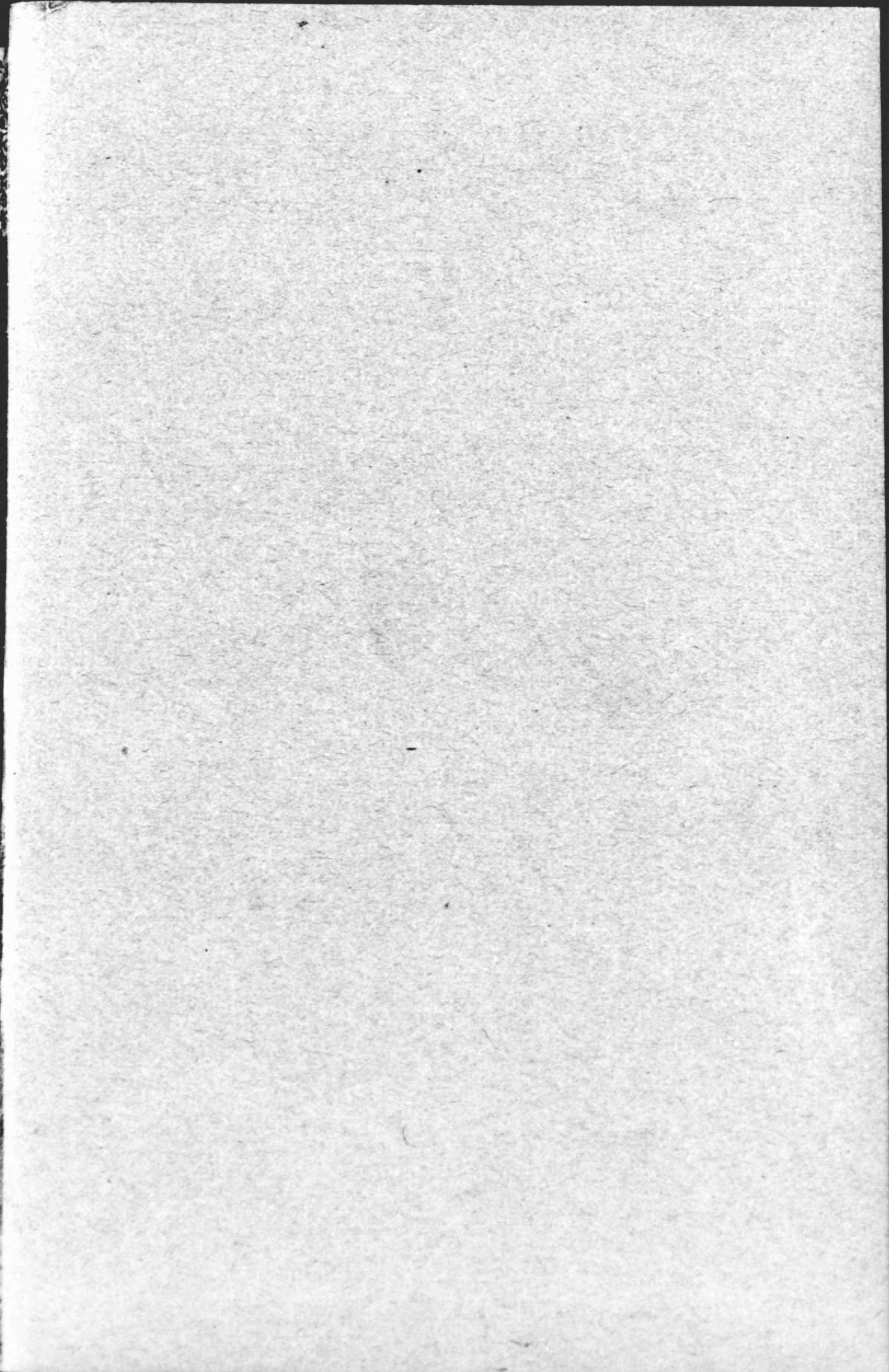
AHP

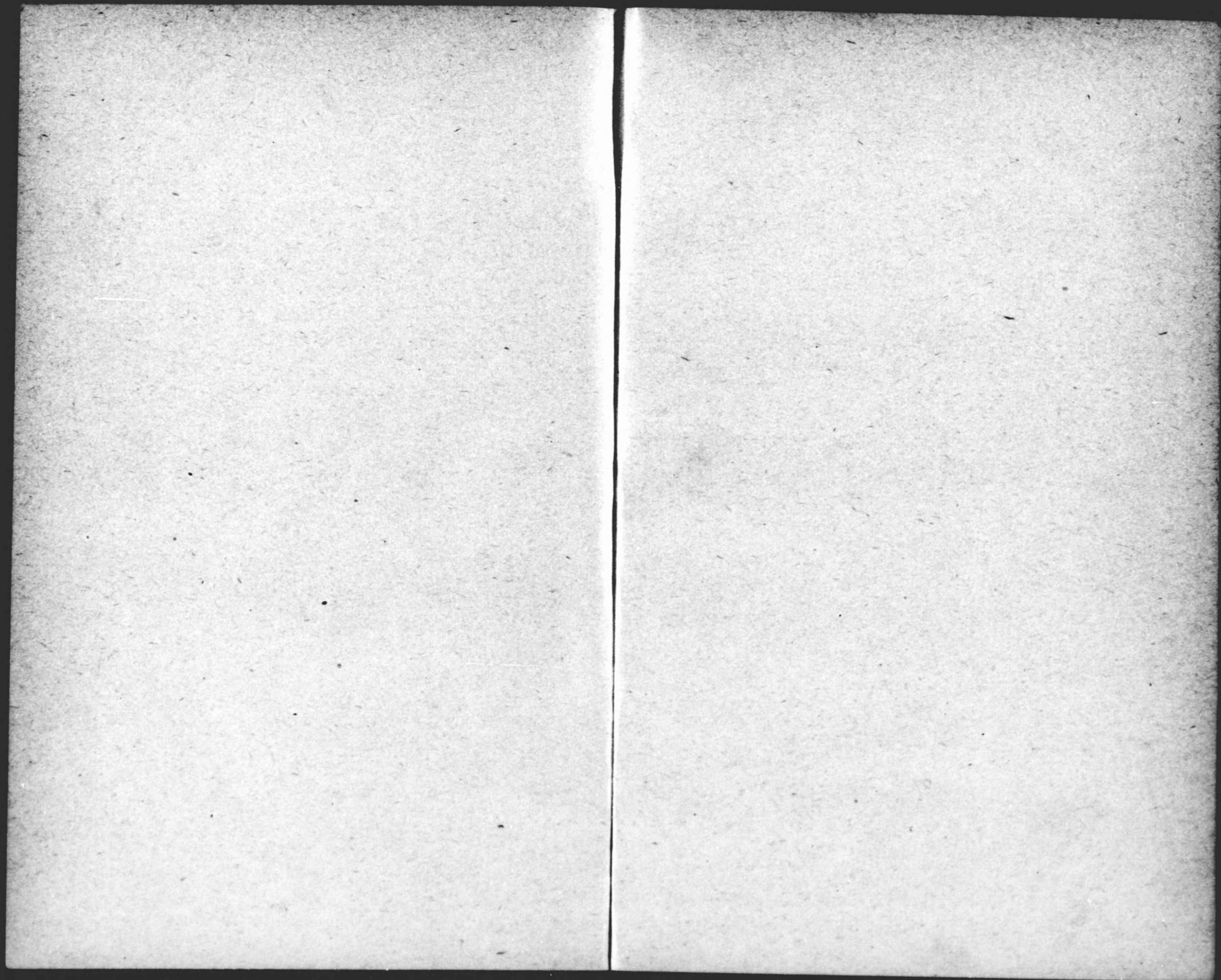




燃
勞
に

輝く青年團







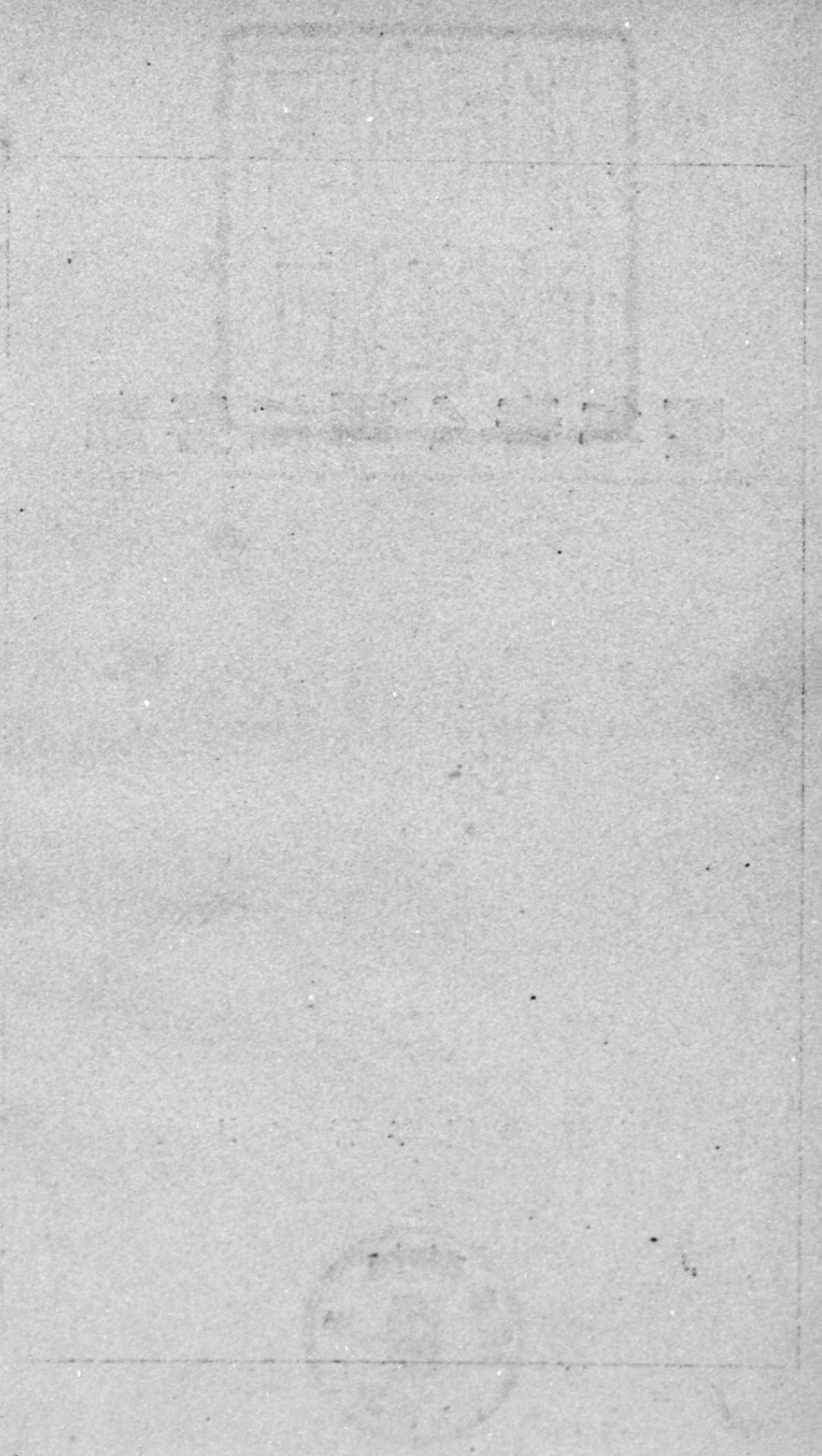
勤勞 忘 輝 々 青 年 團

大日本青年團本部編



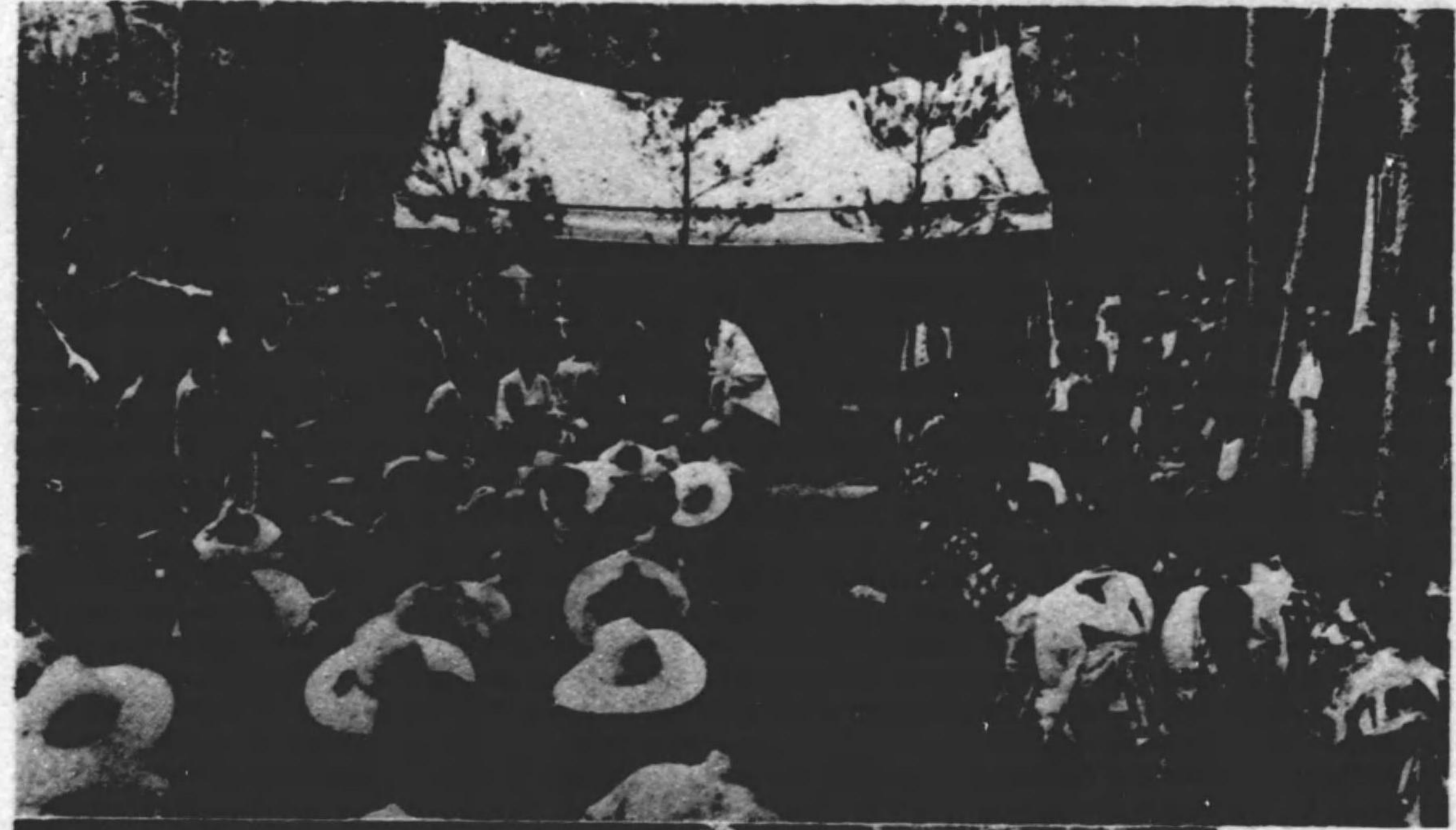
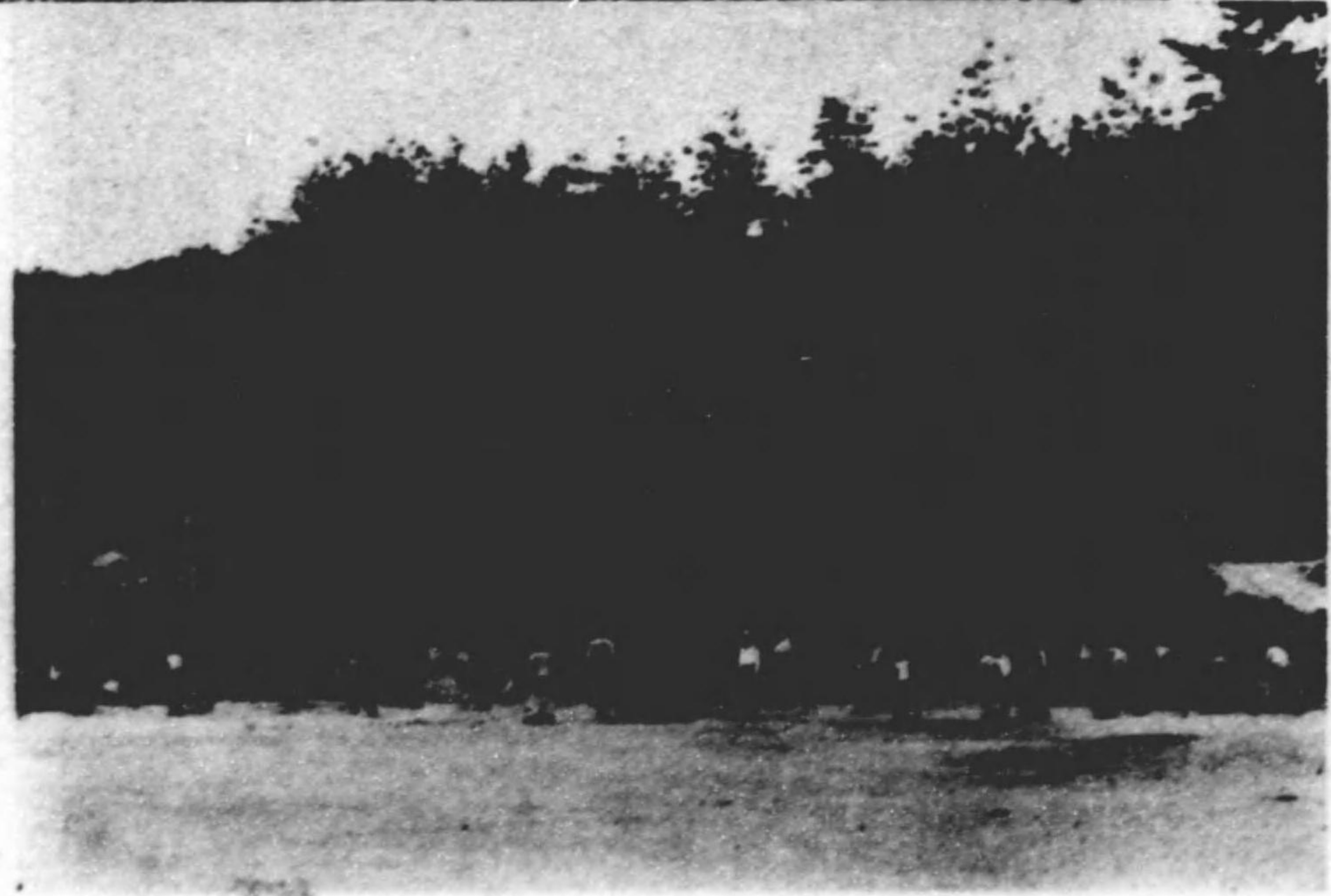


廣島縣世羅郡廣定村青年團青年修築道場建設地全景（說明二十一頁）





左、廣定青年修鍊道場日輪兵舎建設作業
下、道場建設ニ小學兒童(高等科)ノ出動奉仕

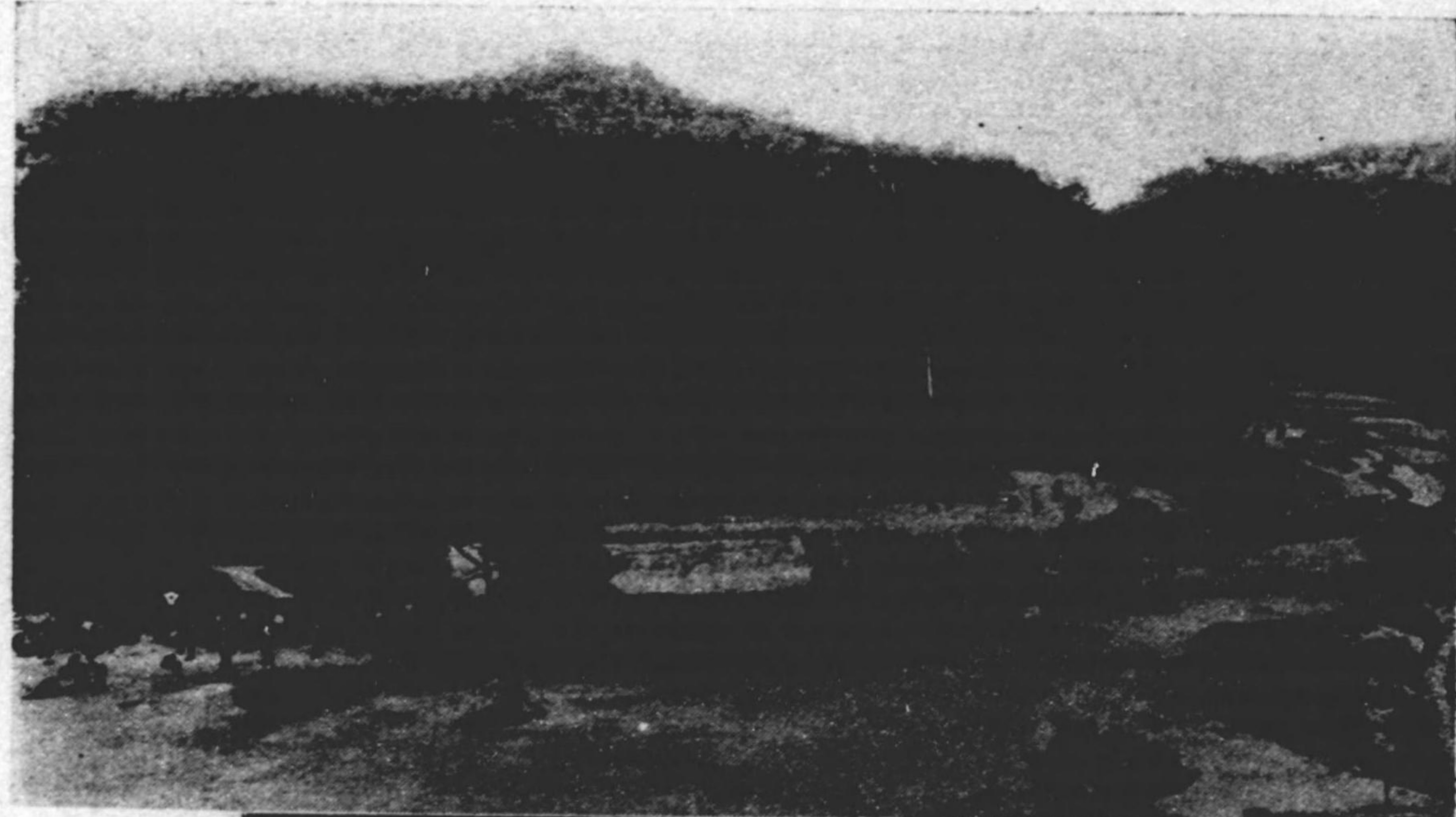


上、廣定青年修鍊道場建設起興式
左、同勤勞奉仕作業狀況

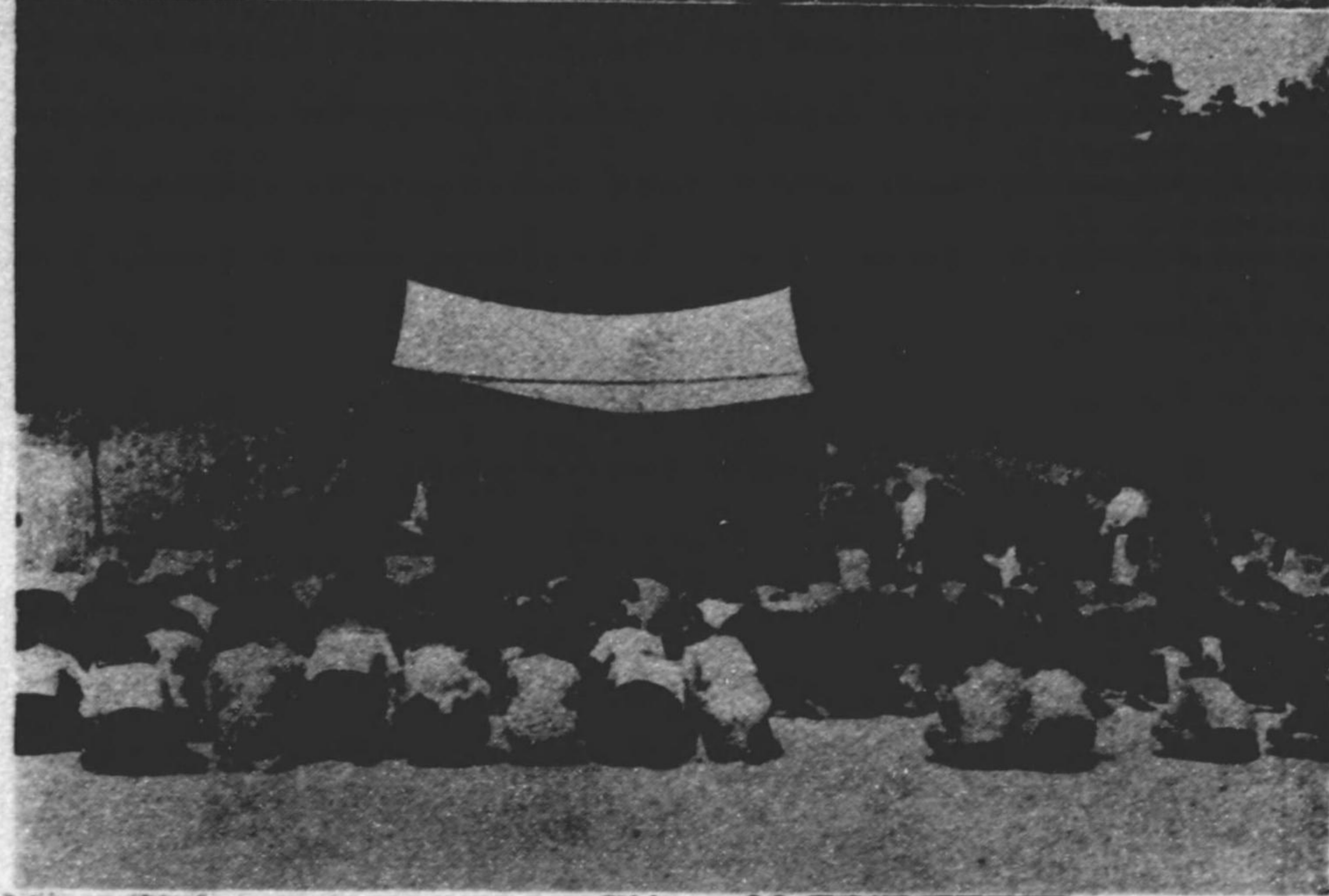


右、廣定青年修鍊道場遙拜所神前ニ於
ケル日本體操(朝夕ノ行事)





上、廣定青年修鍊道場建設敷地ニ於ケル果樹園ノ開拓作業



上、廣定青年修鍊道場遙拜所神殿落成式
左、同獻穀田御田植祭典



はしがき

或は開墾に或は荒廢林地の復舊に植林に、又は道路の開設、公共建築物の建設に、若くは投石、磯掃除、船溜の浚渫等の如き公共事業に、青年團が愛郷愛國の赤誠を傾けて集團的に勤勞奉仕し、資源開發、生産擴充の實を擧ぐると同時に、この實踐を通じて益々日本精神を鍊磨し、勤勞奉公、共同一致の精神を培養し、郷土の振興、躍進日本の建設に献身報國の赤誠を輸すところの、所謂青年勤勞報國運動は今や全國各地の青年團に於て最も力強く實施せられ、到る處に美しく花と咲き輝かしき成果を收めつゝある。

この運動が統制的に組織的に全縣下一齊に展開せられたのは、昭和十一年三重縣に於て「皇紀二千六百年記念青年勤勞報國運動」と銘をうつて實施せられたのが最初であつた。次いで神奈川縣に於ける丹澤報國寮森林治水勤勞奉仕施設が行はれて特色を發揮するに至つた。其後支那事變の勃發に伴ひ、勤勞報國精神が全國に高揚せられ、宮崎縣に於ける祖國振興隊、廣島縣に於ける紀元二千六百年記念青年勤勞報國運動、岩手縣に於ける秩父宮殿下台慮奉戴青年勤勞報國運動、和歌山縣森林治水並災害防止林業施設青年勤勞奉仕團、石川縣青年勤勞報國隊、高知縣土佐青年勤勞報國運動、兵庫縣興國勤勞運動、奈良縣橿原の聖地に於ける建國奉仕隊等々次々にこの種の運動が企畫せられて、殆んど全國各道府縣に實施を見ることゝなつた。

事變の長期に亘るに従つて、國家總動員體制の整備強化が愈々緊要となり、資源開發、物資の増産は益々主要となつてきた。而して之がためには發刺たる青年の先驅的活動を要すること洵に切なるものが有り、青年團員を總動員して農業報國活動の實踐に邁進することは極めて急務となるに至つた。従つて勤勞報國運動は一層その内容を充實し、一面から云へば青年團農業報國運動として展開せられつゝある現狀である。

本冊子は勤勞報國活動に精進しつゝある町村青年團の中、農業報國運動とは相關連はしつゝも趣の異なる特色ある事例若干を収録したものである。

至誠奉公純眞發刺たる青年の同心團結して起つたところ、或は多年に亘る村内の對立を雲散霧消して平和の郷土建設となり、或は捨て、顧みられざりし荒蕪地が化して豐穰の耕地となり、或は應召軍人家庭への温かき奉仕となり、又は美林の造成となり、しかもこの實踐によつて青年に對する村人の理解が頗る高まつて、青年團の強化充實、團員訓練に著しき効果をもたらして實に感激に堪へざるものがある。

尙各府縣に於ける本運動の組織並に實施狀況は本團に於て曩に刊行せる「青年勤勞報國運動の概況」に於て紹介せるを以て、今回は特に町村に於ける具體的事例を掲記した。本冊子が青年團の活動に資するところあれば幸ひである。

昭和十五年五月十日

大日本青年團指導部農漁課

目次

はしがき	(一)
一、理想郷土の建設に奮闘 廣島縣世羅郡廣定村青年團	(一)
一、一調査より大開墾事業を實現 三重縣阿山郡壬生野村青年團	(三元)
一、組織と統制ある勤勞開墾 三重縣安濃郡神戸村青年團	(五)
一、團員一致して拓土建設に邁進 廣島縣比婆郡小奴可村青年團	(五)
一、勞力奉仕班の活動 靜岡縣小笠郡大淵村青年團	(九)
一、造林事業に活躍する興國勤勞隊 兵庫縣多紀郡草山村青年團	(一〇)
一、傳統的勤勞精神を發揮 岩手縣下閉伊郡船越村青年團	(一〇)
一、勤勞倍加と勤勞奉仕 埼玉縣北葛飾郡田宮村青年團	(一四)
一、森林治水に統制ある集團勤勞 山口縣玖珂郡廣瀬村青年團	(一四)
一、開墾と農舎の建設 廣島縣沼隈郡山手村青年團	(一四)

勤勞に輝く青年團

理想郷土の建設に奮闘

廣島縣世羅郡廣定村青年團



和協更生、永遠の理想郷土の建設と、輝しい皇紀二千六百年を記念するため、團員一致協力し、とどまらずも切ゆ^{きり}抜き切り抜かんとの決意と力を以て、青年宿泊修練農民道場建設に邁進してゐる廣定村青年團の活動を、時局下詢にふさはしきものがある。

従来より村内二派に分れ、部落的抗争觀念甚しく村治上の難點となつておりました。この現状を打開し、平和郷土を建設することを認識せる青年は、今日に於てこの現狀を打開し、平和郷土を建設することこそ銃後青年の任務なりと考へ、そして又二千六百年記念事業として、これをおいては他になしと奮然と立上り、涙なくしては聞き得られない村人の冷笑妨害とあらゆる困苦を克服して、遂

に村當局を動かし、村有力者を説いて道場建設の運となつた。以來日章旗翻翻と翻る原野に雄々しき開拓の歩が進められてゐる。

一、道場建設の動機と進展過程

社會理想の建設を念願して

廣定村は福鹽線甲奴驛の西方約三軒の地點にある廣袤三千六十九平方軒で、戸數四百五十七戸人口二千四百九十八人の稻作を主體とする農村である。地勢上村の中央部に一大峠を有して小童字賀の二部落に分れ、各部落に神社、小學校、青年學校、産業組合等を別個に有してゐる。

地勢が村を南北に二分するが如く、遠き昔より人心亦峠を境として二派に分れ、部落的觀念に強く互に相反目して、政治に經濟に教育に、こと毎に醜い抗争が續けられ、常に農村建設に暗雲深く垂れて、本村自治の圓滿なる發展は永遠に期し難き状態であつた。

純眞なる青年達はその峠に立つて靜かに暮れ行く二部落を眼下に見ながら、常に淋しい氣持で村の將來を憂へ、人の和を取返して、明朝廣定村の誕生を一日も早かれと祈るのであつた。

斯かる時突如として今事變に遭遇した青年達は、東亞新秩序建設の重大なるこの時局に當り、村民教化の實際運動を起して、村の現状を打開し、人心の統一を圖り、政治經濟思想の一轉機により、躍進日本の明朝廣定村理想郷を建設することこそ、銃後青年に課せられた重大使命なりと考へたのであつた。

部落的觀念の打壊へ

生れながらにして部落を異にし、村内別個の小學校、青年學校に學び部落的活動をなせる青年は一村民たらずして一部落民として生長するのは當然の事であつた。

茲に於て青年團は常に村の和協更生地方自治の圓滿なる發展を期すべく、民心の指導涵養に重點を置き、先づ學村一體の範を示すべく、本村の男女青年團を統一して一村一體の實を擧げ、銃後の任務遂行に精進した。此の時昭和十三年二月十一日紀元節の佳辰に當り、廣島縣知事より皇紀二千六百年記念青年勤勞報國運動の聲明書が發せられた。

村自治の圓滿なる伸展に資するため、團員は先づ時局の正確なる認識と、民心の涵養指導に努

めたのであつた。そして小我を捨て大同團結、皇軍勇士の心を心として部落的抗爭觀念を打壊根絶し、舉村一體の實を擧ぐべき運動を起す絶好の機會なりとし、且又皇紀二千六百年を迎へ永遠にこの感激を記念すべく奮起したのであつた。

教化運動として

本團では縣の指令に接するや、直ちに部落別に青年幹部會が開催せられたのであつたが、兩部落が期せずして意見の一致を見るに至つた。更に合同協議會を開き、皇紀二千六百年の慶典を奉祝し、是れを永遠に記念し以て村の和協更生に資すべき、廣定村青年宿泊修練農民道場の建設を企圖し、縣提唱の紀元二千六百年記念青年勤勞報國運動に參畫せんことを決議したのであつた。

青年の決意

昭和十三年四月三日廣島縣下郡市代表二十名の青年は、榎原神宮に詣で宣誓式が行はれた。此の日本團幹部十名は、かねて實施踏査の上決定せる道場の建設地である峠上の荒野に集合し、

皇大神宮、皇居を遙拜して、天神地祇に對し奉り、村の更生に資すべき道場建設のためには、身命を培して邁進必ず目的完遂を誓ひ、精神的結合を固め、更に第一線に盡忠奉公の赤誠を捧げつつある皇軍勇士をしのび、銃後を守る青年は村永遠の平和建設のため、献身奉公の誠を捧ぐべく一同血判したのであつた。そして理想郷廣定村建設の素地を培養すべき道場建設に邁進するの決意をした。

青年修練農民道場建設へ

縣の指令に接した村當局では、青年勤勞報國運動として村農會總會に於て、團長並に青年幹部に何等の協議もなく、村内濕田の排水工事をなさしむべく決議し、濕田の排水可能地を調査して所有者と協定し、出仕團員に對しては歛先修理代並に辨當代として金參拾錢位を支給すべく其の準備を完了したのであつた。

其後に於て工事の交渉を受けた青年團は、今回の縣提唱の報國運動は時局對策運動にして、網領に明記されて居る通りその目的實に深遠なるものなりと考へ、憤然として村當局の計畫を斷乎

一蹴した。そして郷土愛に燃ゆる青年日頃の主義方策を貫徹するのは此の時と早速計畫を樹立したのである。

昭和十三年四月二十九日天長の佳辰を卜し廣島武徳殿に於て、起工式並に天歟、天籟の傳達式が行はれることとなつた。幸ひ本團よりも代表者が出席することとなり、當日縣當局に對し計畫書を提出して指導を受け、青年の遠大なる理想を上申し、縣當局の助力を懇請諒解を求めたる所があつた。

代表者歸村するや更に協議會を開き慎重考究され、愈々五月一日青年合同大會を現地に開催し次の様な聲明書を村内に發表すると共に、計畫書を村長に提出して用地の提供を要求したのであつた。

皇紀二千六百年記念青年勤勞報國運動廣定村青年團聲明書

廣島縣知事富田長官閣下ノ趣旨ヲ體シ共同輯睦郷土愛ノ精神ヲ鼓吹シ、産業報國ノ實ヲ擧ゲ廣定村自治ノ圓滿ナル伸展ニ資スルタメ、團員ハ時局ノ真相ヲ明カニ認識シ、民心ノ涵養指導ニ

努メ、從來ノ部落的抗爭觀念ヲ徹廢根絶シ、小我ヲ捨テ、大同團結、皇軍勇士ノ心ヲ心トシテ舉村一體ノ範ヲ示シ、躍進日本ノ明朗理想郷廣定村建設ノ素地ヲ啓培スベキ、青年修練道場ノ建設ヲ企圖シ、皇紀二千六百年慶典ヲ奉祝シ、之ヲ永遠ニ記念シ以テ廣定村ノ和協更生ニ資セントス

一、非常時日本ヲ匡救シ國力ノ充實伸展ヲ期シ上聖明ニ應ヘ奉ラントス

一、遙カニ建國ノ聖業ヲ偲ビ奉リテ天恩ニ報ヒ奉ラントス

一、非常時局ニ對處シテ堅忍持久困苦缺乏ニ堪ユルノ心身ヲ鍛鍊シ一死奉公ノ誠ヲ捧ゲ奉ラントス

青年の要求事項に對し村當局の準備遅緩なるため、七月七日、日支事變一周年記念日に當り現地に第二回青年合同大會を開いて次の如き宣言決議をなし、誓約書を作り、天歟、天籟を祀りたる神前に奉呈し、愈々最後の手段として青年独自の立場に於て、該運動事業に着手するの決意をなし、實行に先立ち更に村に要求交渉を續けた。

宣言決議

聖戰茲ニ一ケ年本日ヲ以テ支那事變一周年ヲ迎フ、將ニ舉國一體億兆一心ノ實ヲ擧ゲ、旺盛ナル氣力ト堅忍不拔ノ精神ヲ鍛鍊シ、如何ナル困苦缺乏ニモ堪ヘ、如何ナル難局ニ直面スルトモ常ニ烈々タル愛國ノ至誠ニ生キ、日本青年タルノ本分達成ニ邁進スルノ覺悟ヲ堅持スベキ秋ト信ズ、本村青年タルモノ宜シク其ノ使命ノ重大ナルヲ自覺シ、協力一致和同彌々團結ヲ堅クシ一村一體本村永遠ノ和協更生ニ努メ、愈々益々日本魂ノ眞面目ヲ發揮シ、斃レテ後已ムノ意氣ヲ以テ一死奉公ノ誠ヲ致サンコトヲ期ス

昭和十三年七月七日

支那事變一周年記念日

廣定村男女青年團

誓約文

皇紀二千六百年記念青年勤勞報國運動廣定村青年修練道場建設ノ計畫成リテ之ガ實行ニ入ラントス、我等若人ハ皇軍勇士ノ心ヲ心トシテ團結勇往邁進以テ遠大ナル理想ノ實現ト深遠ナル目

的達成ニ一死奉公ノ誠ヲ致サンコトヲ天地神明ニ誓ツテ約ス

昭和十三年七月七日

廣定村男女青年團員

氏名

然しながら青年獨自の立場に於て着手せんと決定したのであつたが、村の更生が本運動の目的であるため、村當局の決議を見ずしては永遠の平和建設に支障あらんと思慮し青年幹部は學生の智勇を振ひ、村當局に請願し村會に赤誠を披瀝して、村會開催毎に傍聽し、深夜に有志の門を叩いて了解を求め、合法的穩健工作を以つて東奔西走、或は泣き或は憤り、天に祈り地に訴へ、夜を日に繼いで聖戰二ヶ月三回の村會議會を経て、七月十七日午後十一時に至り初年度要求一町四反歩に對し、僅かながらも七反歩（遙拜所一反、運動場六反）の要求に應ずるの協議を見たのであつた。青年の初心茲に曙光を見るに至りその喜や如何ばかりであつたらう。

明けて十八日より三日間縣立七塚原修練道場に於て縣主催の、青年勤勞報國運動中堅幹部養成指導講習が開催せらるゝことになつてゐた。村の決議を見ずして之に受講するは何んの面目があ

らんと憂慮して居たのであつたが、夜半に至つて漸く七反歩たりとも要求に應ずる旨の協議を見たので、最高幹部二名を直ちに出席受講せしめた。

縣唐川主事補の熱烈な指導を受け、更に其後の経緯を詳細報告した處、同氏より「青年の意氣を諒とす。該運動に参畫する以上骨を一本栗(建設地)に埋むべし」と激勵され、更に一段の決意を固め、念願成就を期して歸村したのであつた。

愈々着手するに當り團員の精神的結合は出來たのであつたが、更に精神鍛鍊をなすため、七月二十六・七日の兩日に亘つて宿泊精神鍛鍊講習會を開き、講師として大日本國民高等學校阿部國治氏を招聘して、日本精神鍛鍊の指導を受けたのであつた。

青年に對する準備工作を進むると共に、更に村當局に對し用地購入の急速なる手續を要求した處、三回の村會に依り、用地購入費造成並に購入手續きにつき次の様な決議がせられた。

第二十九號議案

寄附受納ノ件

廣定村基本財産購入ノタメ左記ノ通り寄附願出アリタルニ依リ受納スルモノトス

記

寄附額及寄附者氏名 合計五〇〇圓

二五〇圓 福原 亮三(村長)	二五圓 瀨尾 清吾(助役)
五〇圓 松本仙太郎	一五圓 奥迫藤四郎(收入役)
四〇圓 立上忠太郎	一〇圓宛 村會議員十二名

廣定村長

第三〇號議案

昭和十三年八月十二日受納シタル基本財産用地購入ノ指定寄附金ヲ以テ皇紀二千六百年記念青年勤勞報國運動トシテノ開墾用地ニアツルタメ左記土地ヲ購入スルモノトス

記

廣定村大字小童子(三五)五九九番地	山林一反歩
同 六〇一番地	山林三反歩
同 六〇〇番地	山林三反歩

廣定村長

第三十三號議案

昭和十三年度歳出入豫算追加

基本財産造成寄附	五〇〇圓
基本財産造成費	五二五圓

購入雜費 二五圓

昭和十三年八月十二日提出

第三十二號議案

廣定村長

村費補助ノ件

廣定村青年團ニ於テ青年修養道場遊拜所設置ニ付キ村費ヲ以テ金五十圓ヲ補助スルモノトス

昭和十三年八月十二日提出

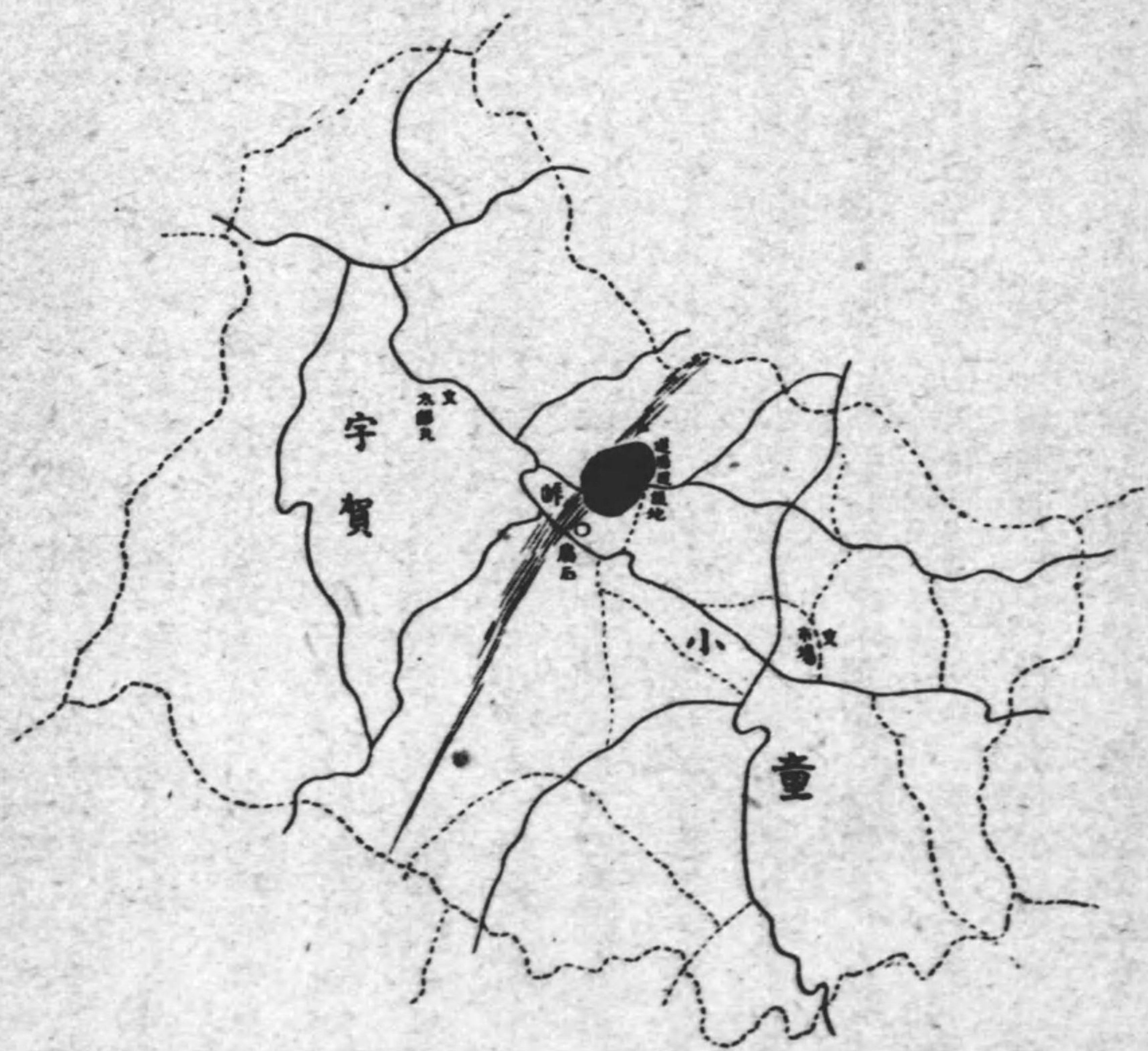
廣定村長

斯の如く有志の寄附金を得て用地七反歩を提供せられたので、八月十三日直ちに勤勞奉仕隊を編成し、續いて八月十五・六日の兩日第一回宿泊修練講習會が開催せられた。尙十四日には道場建設起興式が舉行せられ、縣唐川主事補の臨席を得て、式後紀元二千六百年記念青年勤勞報國運動と本村の更生策に就き講演會を開き、村民と共に最初の一畝が力強く打下された。

以來計畫に従つて作業を續け、一方寄附金募集に或は團員勤勞賃銀獲得作業として、木材を運搬し或は村内先覺者の誘導に日夜苦心が續けられた。

村費購入七段歩の開拓作業は、昭和十三年十二月修了したので、十三年度の作業地として篤志者新谷幾多郎氏の山林三段五畝歩の無償借入れを受けて道場敷地となし、三月までの作業を繼續

廣定村略圖



することゝし、かくして第一年は終り、昭和十四年一月一日を迎へ新年拜賀式終了後、一年の計は元旦にありと、終日勤勞奉仕作業をなし、希望に燃える第二年度は出發せられた。

斯く作業を續くると共に二月二日幹部會を開催協議して、昭和十四年度用地購入計畫を村當局に要求したのであつた。即ち建物敷地二反、果樹園三反、水田三反、畑地一反、用水池一反、この見積價格一千百圓を昭和十四年度歳出入豫算審議會に、更に通常村會に提出計上方を依頼し、團長より正式要求すると共に、日夜諒解運動をなしたのであつたが、村會の策略なりとて、豫算は僅か百五十圓計上せられしのみにて、幹部は直ちに村長に其の理由を正した所、村經濟上並に社會的策路も要することであるからとて聞入れられず、唯豫算は百五十圓であるが誠心誠意本運動のため努力するとの誠意ある言に信頼し、青年は地主と直接交渉をなすに至つた。

村議等の所謂社會的策路を排撃して、眞に青年の大理想に覺醒せしむべく、常に現地讓渡交渉をなすと共に、無償借入したところの山林を開拓し、益々一致團結目的完遂に向つて邁進した。

かくの如き青年の熱意は自然と村人を感激せしめ、村内素封家島原傳右衛門氏より、山林二反九畝を果樹園に提供された。尙從來兩部落に設置せられて居た獻穀田を、青年が奉耕する以上一

村一ヶ所に合併して之を統一すべきであるとし、十三年度に於て整理した水田一反歩を以て廣定村獻穀田を設置した。

昭和十三年八月起興以來滿一ヶ年の、昭和十四年八月二十一日、一周年記念式と共に、遙拜所並に社殿落成式が盛大壯嚴裡に行はれた。その際村内各種團體の出席を勧誘し、講師として依頼した縣社會教育課長の講演を聴取せしめたのであつたが、その熱烈なる講演と共に、滿一ヶ年間凡ゆる困苦を忍んで、村更生平和建設のために奉仕した若人達の、血と汗と涙の結晶である道場を眼前に見て、村當局を始め村民達は、自然に青年活動援助の聲が放たれ、直ちに村長、村會議員、分會長等が團員慰勞金とし計四十七圓を提供せられた。又婦人會員は兩日間に亘り炊き出しを行ひ、漸く青年の努力も村人より認めらるゝこととなり、九月四日には村會一致左の如き決議を見るに至つた。

第三十八號議案

寄附受納ノ件

前記ノ者ヨリ左記山林寄附願出アリタルニヨリ之ヲ受納シ皇紀二千六百年青年勤勞報國運動用地ニ充ツルモ

廣定村大字字賀 島原 傳右衛門

記

一、廣定村大字小童中塞六二七番地 山林 二反九畝十三步

昭和十四年九月四日提出

廣 定 村 長

第三十九號議案

廣定村歳出入豫算更生

- 一、歳出經常部ニ於テ一七項基本財産造成費雜費一圓ナリシヲ一九圓追加シテ二〇圓計上
- 二、歳出臨時部ニ於テ一七項皇紀二千六百年記念事業費中(一)敷地買上費一五〇圓ナリシヲ一六一圓追加シテ三一一圓トナシ(二)雜費五〇圓追加シテ計三六一圓ヲ計上ス

此の金額三百六十一圓と、指定寄附百三十圓計五百三十一圓を以つて、山林三反五畝歩並に運動場擴張地一反歩を購入提供せられた。本團としても益々一致協力して村内有志の誘導をなすと共に、道場建設設備充實資金募集に努めた結果、日輪兵舎、炊事場、井戸給水設備、農具購入並に講堂代用バラック建設も完了し、着々實現すると共に青年の意氣一層あがり、昨年中既に二十數日間出勤奉仕してゐる。

尙昨年十一月一ヶ半年を回顧して語られた團長の次の感想によりその苦心が充分窺はれる。

赤い夕日を浴びて遙拜所の頂上に立ち、靜かに社前に詣れば喜びか將た悲しみか、過ぎし一年半の思ひ出に止めどもなく落つる涙あり。

よくもやつてくれた。よくも堪へ忍んで來てくれた。一絲亂れずあれまで團員を統一してくれた幹部!!

直接指導に立つてくれた専任教員、どんなにかつらかつたらうと思ふ。

激しい一日の作業を終つて團員の歸つた後、夜半に至るまで協議を續けるのは毎回のことであつた。

日暮れて寒風吹き荒ぶ運動場の木蔭で手を握つて泣いて居た指導者の尊い姿が眼前に浮ぶ。

公務を持ち病父を持つ幹部が、一ヶ年二十五日間の無缺席のみならず、數十日を此の運動のため捧げてくれた姿。

此の運動の完成までは退團せぬと雄々しく奉仕を續ける青年の姿。

結婚前日までモンペイ姿で奉仕してくれた女子青年の顔。

病に犯され百五十本の注射を打ちながらも意氣で精勵を續けてくれた幹部の姿。

道場敷地を村中央部より一方へ取らんがため、敷地を變れば校舎の一棟位は寄附してやると呼び掛けた有志を斷乎一蹴した幹部の意氣。

異郷ながらも本運動のため莫大な寄附を賜つた永山參與官殿、元代議士米田氏、廣島、福山在住の本村出身者よりの寄附。

次から次へと頭に描けば過ぐる一ケ年もほんとに永い／＼夢であつた。

夕日は既に沈んで眼下には記念老松を中に靜かに眠る運動場、遙か彼方には樹間に日輪兵舎が繪の様に見える。

工事半の道場敷地、日毎に開拓される果樹園、思へば一本、一石、一塊の土にも若人達の血と涙と汗が滲んでゐるのだ。

日本一の本村青年團は必らずや日本一の道場を建設し、茲に理想郷土廣定村を建設するためによるこんで礎となつてくれるのだ。

若人よ 幸あれと祈る。

青年團の概況

本團は二支部より成り現在九十名の團員を有してゐる。事務組織としては社會、實業、其他六部を置き、團長には青年學校長が之に當つてゐる。豫算百七十九圓を計上し、各方面に亘つて活動してゐるが、本團の經營上の主眼點は次の廣定村是並に團指導精神によつて明かにされてゐる。

1、廣定村是

- 一、國體ヲ重ンジ敬神崇祖ノ精神ヲ養ヒ各々其ノ本分ヲ守リ至誠良ク其ノ責務ヲ盡シ以テ全村ノ振興ヲ圖ルコト
- 一、本村ニ即シタル教育ヲ盛ニシ共存同榮諧和ノ實ヲ舉ゲ穩健ナル民風ヲ涵養スルコト
- 一、産業ノ進展ヲ圖リ弊風ノ改善ニヨリ以テ富力ヲ増進シ生活ノ基礎ヲ安定スルコト

2、團の指導精神

- 大日本青年團綱領ニ則リ村是綱領ヲ體シ大日本青年トシテノ眞使命ニ邁進セシメントス
- 一、國體觀念ヲ明徴ニシ敬神崇祖忠孝ノ本義ヲ體シ献身奉公國運ノ進展ニ盡ス
 - 一、協同一致實實剛健ナル民風ヲ馴致シ理想郷建設ヲ期ス

一、尊農ノ氣風ヲ涵養シ勤勞ヲ樂シミ自主創造農村樂土ノ建設ヲ期ス

一、體力ノ向上ヲ圖リ頑健ナル心身ヲ以テ各自職分ノ遂行ヲ期ス

一、養成大和ノ精神ヲ一貫シテ八紘一字世界ノ平和人類ノ共榮ニ努ム

一、部落的觀念ヲ打破シテ人心ノ統一ヲ圖リ舉村一體ノ實ヲ舉ゲ地方自治ノ進展ヲ期ス

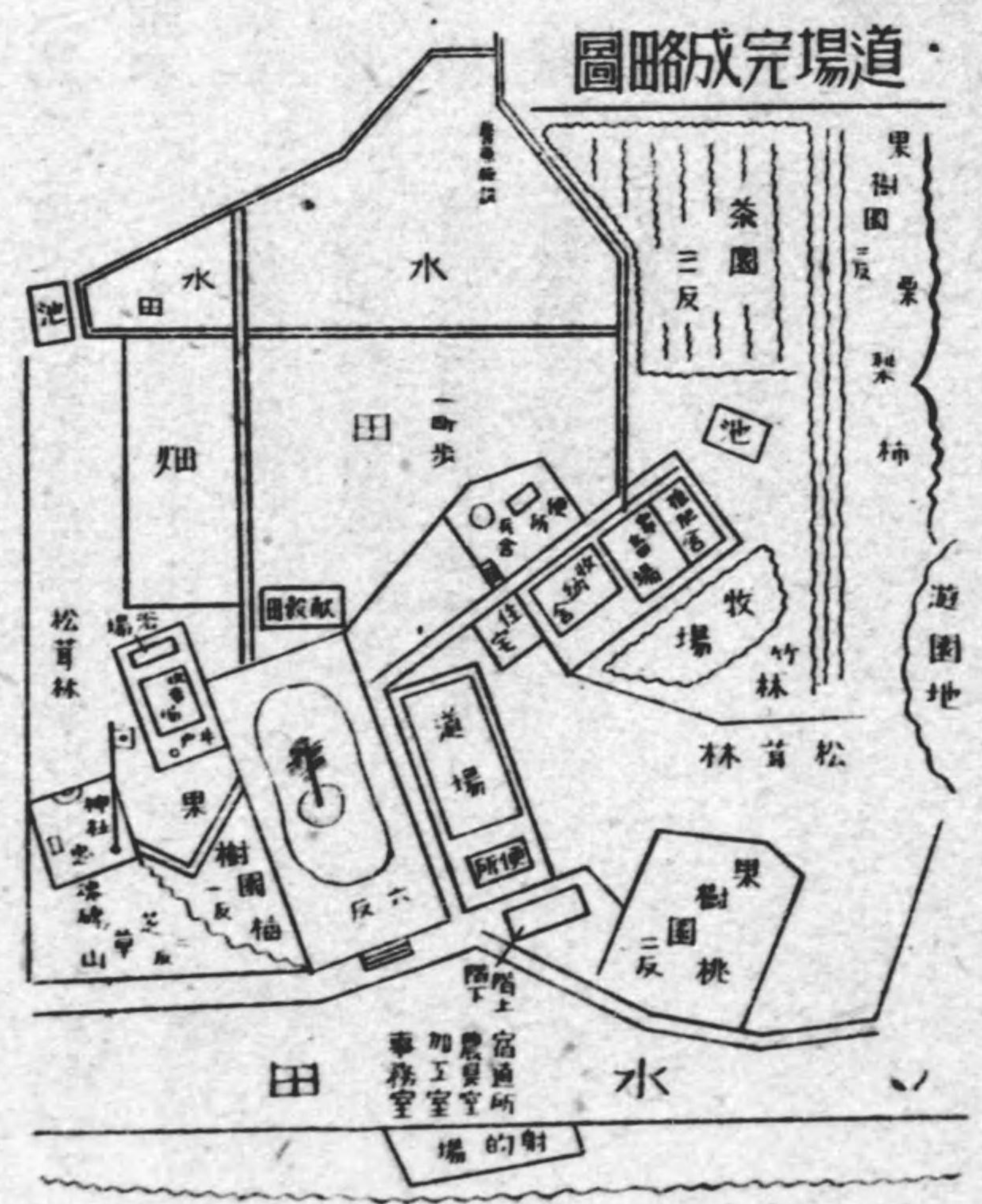
尙本團では時局に對處して日本精神の昂揚、時局の認識、銃後の施設、家庭生活の刷新、非常經濟對策への協調、體力の向上、非常訓練等の實踐項目を定め、各項目に亘り詳細なる必行事項を定めて實行してゐる。

二、道場建設の事業計畫とその実績

大體以上に依つて本團の青年宿泊修練農民道場建設事業の概況を知り得るのであるが、更に詳細な事業計畫、實施方法並にその実績等について記することとする。

一、事業の目的

1、村内地勢上の一大峠に於て、村の中央に一大集團地を求め、勤勞奉仕開拓して青年團修練



道場を實現す。

2、集團地を開拓して青年の修練道場を建設するの青年奉仕活動をして、村教化を圖り政治教育思想經濟の一轉機を加へ、永遠の更生を策すの運動を起さんとす。

二、修練道場教育基本

一、日本精神の確立 造拜所、神殿

二、軍事訓練 大運動場の設置

一、修養と研鑽 青年道場建設と訓練設備

一、團體訓練 合宿訓練設備

一、勤勞報國 用地開拓

一、農士道修練 農場の建設經營

三、村内教化と將來

一、村内一圓の會場工作

一、教育の中央統一策〔青年教育
小學校教育〕

一、村産業開發施設

一、各種團體の中央集合作

四、勤勞奉仕活動訓練

1、廣定村青年勤勞奉仕隊編成

奉仕隊編成體系

隊長 一名(團長)

指導員 二名(男子專任教員)

補助員 二名(女子專任教員)

中隊長 一名 小隊長 三名

分隊長 一二名 救護班長 一名

隊員 男子 九〇名 女子 五〇名

2、奉仕出勤日數

一ヶ年二十五日

3、宿泊訓練方法

午前五時—七時	起床、點呼、駢足、喫、神前行事、日本體操
朝ノ行事	國旗掲揚、東方遙拜、天皇陛下彌榮三唱、團長訓辭、綱領朗誦
同 七時—八時	朝食、休憩、農具手入
同 八時—九時	讀書、研究、講話
同 九時—正午	勤勞作業
午後零時—一時	中食休憩
同 一時—二時	團體訓練
同 二時—五時	勤勞作業
同 五時—六時	唱歌、遊戲、體操（大日本青年體操）
同 六時—六時半	國旗降下式、夕ノ祈リ
同 六時半—七時	整理
同 七時—八時	夕食休憩

午後八時—九時	讀書、靜座、朗誦
同 九時—九時一〇分	點呼就床

五、事業計畫大要

1、廣定村青年修練道場建設事業計畫

イ、敷地工事

運動場六反歩 青年の體育施設軍事訓練の徹底を圖り、時局下の國力充實、銃後強化國防強化に萬全を期す

建物敷地四反歩 宿泊訓練道場、兵舎、炊事場、農舎の敷地

遙拜所一反歩 神社の造營、國旗掲揚臺、忠魂碑建設をなし、皇居の遙拜敬神崇祖、護國の英靈の冥福祈念の靈域とす

ロ、農場開拓工事

水田一町歩 宿泊訓練費、施設費の自給

畑地二反歩 蔬菜並特用作物の栽培

果樹園五反歩 梅を主として栽培
 茶園三反歩 輸出作物の振興を期す
 竹林一反歩 竹林及筍の利用
 秣場二反歩 家畜飼料の栽培
 用水池二反歩 水源地を築造し兼ねて山村水産の振興を期す
 へ、道路の開設

縣道より道場に至る間の道路を開設す

二、建築工事

國旗掲揚臺 國體明徴
 青年神社 青年修養の的と仰ぎ崇高なる日本精神と躍進日本の建設に邁進する不動の信念を培養する源泉地たらしむ
 日輪兵舎(二棟) 國土開拓勤勞奉仕作業實施にあたり宿泊訓練をなし學國一致堅忍持久困苦缺乏に耐へ忍ぶの風尙を作興す

炊 事 室 食料の調理

講堂代用バラック 訓練道場建設後は共同作業場となす

訓練道場 修養研究道場の講習會場並に武道修練場となし階上は村講堂とし村民

一致協力融合の殿堂たらしむ

農 舍 建設 牛舍、雞舍、豚舍、收納舍、農具室、事務所、堆肥舍、肥溜

ホ、訓練設備

へ、獻穀田設置一反歩 廣定村獻穀田を設置し青年をして謹作奉耕せしむ、敬神崇祖の念を涵養振作し國體明徴の精神強化に力む

2、廣定村青年修練道場建設工事年度別分計畫

種 別	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
一 敷地工事	運動場(六反) 遙拜所(一反)	建物敷地(四反)	建物敷地(三反)		
二 農場開拓	茶園(三反) 果樹園(一反)	水田(三反) 畑地(一反)	水田(三反) 畑地(一反)	水田(三反) 竹林(一反)	水田(一反)

人員	年度		計
	男	女	
正團員	九〇人	五〇	一四〇
	九五人	五五	一五〇
	九〇人	六〇	一五〇
	八〇人	五〇	一三〇
	九五人	五五	一五〇

〔備考〕 着手當時正團員にして退團年齢に達したるものも本運動に奉仕することを誓約して出勤しつゝあり
一人一日開拓能力 平均二坪

5、道場建設経費支出年度別分計表

年度	農 場 經 營					建 築	農 具	計
	賦發田	水田	畑地	果樹園	茶園			
十三年						國旗掲揚臺 二五〇円 社 五〇〇円 小便所 五〇〇円 小屋 五〇〇円	三〇	六五〇
十四年	三〇円					兵舎 四〇〇円 炊事場 二五〇円 井戸 一五〇円 バラック 建八〇〇円	一〇〇	一八三〇
十五年	三〇	六〇	五〇	二五	三〇	收納舎 四〇〇円 農具室 二〇〇円 事務室 一〇〇円	三〇〇	一三三〇
十六年	三〇	一〇〇	一〇〇	一五	五〇	肥溜 五〇〇円 畜舎 三〇〇円 堆肥舎 三〇〇円 訓練設備 五〇〇円	二〇〇	二〇九〇
十七年	三〇	二〇〇	一〇〇	一七五	六五	道魂碑 一〇〇〇円 道場 一〇〇〇〇円	五〇〇	三三三〇

用地は村經濟支辨並に篤志家の寄附とす

6、道場建設経費支出年度別分計表

年度	種目	必要總經費	寄附募集	團員勤勞奉仕賃金	農場收益金
十三年		六五〇,〇〇	五五〇,〇〇	一〇〇,〇〇	
十四年		一八〇,〇〇	一五九,〇〇	一〇〇,〇〇	一〇一,〇〇
十五年		二七五,〇〇	一七九,〇〇		一九五,〇〇
十六年		二〇七,〇〇	一七七,〇〇		三三二,〇〇
十七年		三三三,〇〇	二二二,〇〇		一〇一〇,〇〇

7、完成後ノ經營目標

收 入		支 出	
種 目	金 額	種 目	金 額
水田 (米二十五石) 收入	七五〇	農業經營費 (肥料藥劑其他)	四九〇
畑地 (蔬菜) 收入	一〇〇	宿泊訓練費 (食費雜費)	四〇〇

果樹園收入	500	修養研究費	150
茶園收入	150	設備補充修理費	150
家畜收入	200	雜費	10
計	1,250	計	1,110

差引殘額四〇〇圓は社會教育施設費とす

8、昭和十三年道場建設事績

- 一、勤勞奉仕出動日數(自十三年八月) 一人 二十三日
- 二、延人員 男 一六一六人 女 七三七人 計二三三三人
- 三、開拓工事

種目	地均シ	面積	勞力		經費
			男	女	
遙拜所	地均シ	一反	二六七人	三三人	四八八
運動場	地均シ	五反	五七	三二	八三

種目	伐木	面積	勞力	經費	摘要
運動場	伐木	天	二〇	六	
梅園造成	開拓造成	一反	七	二〇	四圓一苗木七十本代
畝穀田	開拓整理	一反	二六	一〇	五圓一肥料代
建物敷地	伐木	三反五畝	五	三	

四、道場設備

種目	勞力		經費	摘要
	男	女		
國旗掲揚臺	三〇人	三〇人	二〇、〇〇	大國旗一、金具其ノ他 柱臺ノ材料ノ寄附
遙拜臺			一〇、〇〇	
神殿造營			二五、〇〇	大工、オロシ
石垣	四〇		一八、〇〇	
兵舎代用小屋	八三	三三人	五、〇〇	木材料、用地、山林伐採 藁ナワ團員持參ス
便所	三三	五	三〇	

農具購入	4,500	小車二、手鏡三〇、ベケツ四
炊事道具	5,000	大ヤカン四ケ、杓子大一、小二
團旗新調	50,000	

五、勤勞賃金の獲得

出勤人員 一三一人

木負ヒ 三三、〇〇圓 板負ヒ 一六、〇〇圓 賣店 一〇、〇〇圓

パルプ 四五、六一圓 計 一〇三、六一圓

六、寄附金

五〇〇、〇〇圓 用地購入費

五九二、〇〇圓 建備費

七、團員ノ表彰

奉仕作業に皆勤せるもの男子青年團員二十四名女子青年團員七名に對し左記のやうな表彰狀を授與した。

表彰狀

右者紀元二千六百年記念青年勤勞報國運動廣定村青年修練道場建設事業起工以來一ケ年間奉仕出勤ニ際シ皆勤セリ遙拜所落成ノ式典ヲ舉グルニアタリ茲ニ賞狀並ニ賞牌ヲ授與シ之ヲ表彰ス

昭和十四年八月二十一日

廣定村青年團長 原 田 憲 二

三、道場建設と村民の覺醒

以上に依つて既に明かである通り、本團が更生郷土の建設を圖らんがため、先づ人心の統一により村教化をなさんとするの青年運動に對して、只に青年團の道場建設のみと解した村民は、この計畫を嘲笑し、部落的觀念強き村民は之を妨害する等冷淡極りなき態度であつた。此の情勢下に於て青年は悲憤の涙を抑へて、唯和協更生の光明を仰がんとする正義の一念、屈することなく恐ることなく、只管奉仕活動に精進しつゝ、村内民心の指導に努めたのであつた。そして先輩の



援助によつて出来上つた遙拜所の落成式並びに一週年記念式に参列した村民は、その活動の實績を眼前に見て、熱烈なる青年の意氣と嚴をも貫くの氣魄に漸く青年の遠大なる理想を知り、精神的援助は次第に具體化するに至つた。

社會理想の建設は理論的指導ならず、實踐自己を犠牲にして自ら率先建設するにありとの信念を得たのであつた。然し青年は更に誇ることなく黙々として高き理想と信仰の日章旗翻る原野に開拓作業を続けつゝ、村内教化に努めた結果、一年有半にして青年學校二校を統一して、獨立校となし、更に教育の統一、政治經濟の統一に最大の努力を傾注してゐる。

尙この道場建設に村民の援助協力を具體的な事例を以つて列記すると

一、用地の提供

- 1、用地購入金の寄附
- 2、用地を無償提供し作業繼續援助
- 3、用地寄附
- 4、獻穀田の寄附斡旋

5、用地購入斡旋

二、道場建設費の寄附

本村財政は制限一杯の戸數割を附加して漸く財政運用をなしつゝある現状で、新規事業は絶対に不可能なため、青年團は總經費二萬八千六百六十五圓の中、一千六百九十八圓五十錢を勸勞作業によつて獲得せんと計畫せられたが、前途甚だ憂慮すべき状態であつた。然し一同は目的貫徹に努力する雄々しき活動振りに、篤志家より昭和十三年度に五百五十二圓三十錢、昭和十四年度に一千六十八圓の寄附があつた。

三、道場建設作業に出仕援助

道場建設は青年の奉仕活動によつて工事が進まれつゝあるが、特別の技術を要する工事ありて苦心と勞力多大なるに同情して、村内技術職人は自ら進んで出仕し、便所の建設、神殿の造營其他の作業を援助せられた。

四、出勤團員の慰勞

本事業に出動する團員に對しては、團として何一つ慰勞することもなく、手持辨當、自家用具

に依る勤勞奉仕活動である。ために村民より現物の提供又は金錢の提供等ありたり。

五、小學兒童の出勤奉仕

村内宇賀、小童小學校の高等科兒童は本事業に出勤奉仕した。

六、中等學校生徒の本運動に参劇

本村出身者にして中等學校に在學せる生徒は、夏中休暇を利用して出勤し團員と共に終日奉仕せられた。

以上記述したやうに初めは四面楚歌の裡に起興されたこの事業の顯著なる實は次第に村人の理解を得、團長以下幹部團員は愈々團結を堅くし、一路村教化に突進し遠大なる理想實現に邁進してゐるが、更に本運動の前途には幾百年根強く育てられた部落根情あり、これを打破し徹底的に根絶するには尙前途難關多々あるとし、最後迄戦ひ斃れる迄村内誘導に努めて、有終の美を發揮するこそ青年の大使命なりと考へ本運動の實現に邁進してゐる。

一 調査より大開墾事業を實現

三重縣阿山郡壬生野村青年團

愛郷の熱情に燃える青年達の一研究調査と、撓まざる奮闘努力が結ばれて、今日では舉村一致の大開墾事業となり、數年後の適正農家經營を目ざし、他方皇國農民精神の涵養と、開墾地經營の先驅たらしむるため、農民道場を創設し、更生の意氣に燃え、一至和協、不拔の決意と力を以て、理想郷土建設に邁進して居る壬生野村青年團の活動こそ新興農村の春を待つつゝ、まじやかな相貌である。

この村は關西本線新堂驛の東南約二軒の地點にある、戸數四三〇戸ばかりで、耕地は田畑合せて一戸當り約一町一段歩を有し養蠶、製荏等を副業としてゐる和かな純農村である。

今日のこの開墾事業が、村を擧げての大運動となるまでには壬生野村青年團の勃々として燃え

る郷土愛と、斃れて後やむの、不屈不撓の涙ぐましい努力のあつた事を忘れることは出来ない。
遡つて大正十三年十二月本村小學校で、村の教化展覽會が開催せらるゝこととなるや、本團川
東支部では、部落の實態を調査し、その實態を究明することは、部落更生の上に最も重要なこと
であると考へ、展覽會出品物の一として區勢調査を企畫實施し、その成績を一般に展示したので
あつた。これが抑々の始りで次年度には、全村青年團一齊の調査となり、愈々この調査の必要を
痛感し、以來十數年間今日なほ繼續實施されてゐる。

當時は歐洲大戰當時の好景氣の餘波を受け、農産物價は暴落し、農家の收入は著しく減少した
のであるが、村民の夢なほさめず、生活は依然として多額の支出を見るの狀態であつた。
今にしてこの現状を打開し、徹底したる根本對策を講じ村更生を圖らなければと!! 調査に依
つて現はれた數字を基礎に、種々研究の結果先づ精神的の作興を圖るための應急的對策と、生産
消費方面の改善と共に、開墾による耕地擴大の永久的對策を樹立し、村民の覺醒を促したのであ
つた。

そして應急的對策をして、一般村民に精神的覺醒を促すには、青年の實行垂範による外なしと

奥井教務員を中心として、神社前の早天修養會に、佛前修道會に、其他の講習會で日本精神の涵
養に精進した。又動々ともすれば理論に走り易き青年の弊を改め、或は奉仕することによつて青
年の修養の完成を期せんと、部の事業計畫も殆んど奉仕作業を以て之に當てた。昭和五・六年に
至り農村の疲弊は困憊の極に達し、村民の所有田は年を追ふて他村に流出し、土を捨て、都市に
走る者も増加し、愈々戸數の漸減を來し、意氣消沈全く生氣を失ひ「農村よ何處へ行く」のなげ
かわしき實情に立ち至つたのであつた。この狀態を見て青年一同は、更に深き決意を固め、この
困憊の農村を救ふのは吾等青年の力にありとなし、あらゆる苦難と闘ひつゝ、皇國農民魂の練成に
邁進したのであつた。

一方永久的對策としては、調査に依つて得た處の基礎的數字と、生産と消費との收支關係等に
付種々考究した結果、どうしても解決しなければならぬ根本的原因として、村内に於ける土地
と人口との不調和を究明し、そしてこの村を更生させ眞の理想郷土たらしむるには、不毛地を開
拓して、一戸當りの耕地面積を擴大し、各農家經營規模を適正化する以外に道なしと叫んだので
あつた。

右は生産の部のほんの一部分に過ぎないがこの外家畜、緑肥用作物、園藝、果樹、工業作物、蔬菜、花卉、米、食用作物、林産物、製茶、水産養殖其他詳細なる調査が行はれてゐる。

田畑自作反別調												
耕地潰廢		耕地擴張		不作地		小作反別		自作反別		耕作反別		種別
畑	田	畑	田	畑	田	畑	田	畑	田	畑	田	田畑別
												反別
												別

田畑自作反別區別										
桑園		果樹		乾田		水田		合計		種別
一	毛	一	毛	一	毛	一	毛	一	毛	田畑別
										反別
										別

米及作物反別					桑園						種別
計	旭	愛	錦	品	茶	計	立	高	中	根	
		國		種別	畑		通	刈	刈	刈	別
				早中晚別							田
				作付反別							畑
											其他
											合計

(秋夏へ又(冬用量) 桑用蠶春			(蠶秋夏へ又) 蠶 春						
賣	販	入	合	屑	玉	二	上	掃	項
			計	マ	マ	等	マ	立 <td>目 </td>	目
	村内販賣	自家作		ユ	ユ	マ	ユ	量	白
	村外販賣	村内購入						枚	繭
	合	村外購入						枚	種
	計	合計						枚	種

教		薪炭燈料費						費				
通信	種別	計	マツチ	電燈	石油及 石油類	炭	薪割木	種別	計	外套	傘	履物
	數量							數量				
	價格							價格				
公		諸稅					育費					
區經費	種別	計	所得稅	營業稅	縣村稅	國稅	種別	計	筆墨代	書籍	雜誌	新聞
	數量						金額					
	金額						額					
產生				諸掛金								
蠶種代	苗代	桑代	肥料代	種別	計	金利	貯金	諸掛金	額母子	敷地料	合諸費	社寺費
				員數								
				金額								

嗜		品需食									
和酒	種別	其他計	野菜	魚類	砂糖	酢	鹽	醬味油	麥	米	種別
	數量										數量
	價格										價格
式儀				品好							
贈物	出產	葬式	婚禮	種別	其他計	サイダー	ビール	上下茶	菓子	煙草	洋酒
				數量							
				價格							
服被			費際交						費		
冠物	木綿物	絹物	種別	計	旅行	來客	通信	進物	種別	計	年忌
			數量						數量		
			價格						價格		

基		金	
代	驅虫代	其他	計
農具費			
種別	數量	價格	
手			
田打車			
其他			
衛生費			
種別	價格		
診察費			
藥價			
補育費			

尚、以上の如き調査票によつて得たるものを集計したる川東支部の最近三ヶ年の実績は次の通りである。

一、經營の基本調査

年度別	土地	財貨	戸數	人口	備考
昭和十一年度	二六、一七〇	六九、〇〇〇	一一三	五九一	財貨ハ區民ノ所有スル土地以外ノモノヲ合シタルモノナリ
同 十二年度	二六、一八二	六三、〇〇〇	一二三	六二二	
同 十三年度	二六、六九六	六四八、〇〇〇	一二三	六二八	

二、一ヶ年間の生産収入調査

年次別	米	麥	自給肥料	金利	桑及繭	養蚕	其他
昭和十一年	四三、二〇〇	一一、九五〇	九、〇〇〇	五、一〇〇	五、〇〇〇	三、六〇〇	二、〇〇〇
同 十二年	五七、〇〇〇	一三、八五三	一三、〇〇〇	六、二〇〇	四、八〇〇	三、八〇〇	三〇、一〇〇
同 十三年	六四、七〇〇	二四、九六五	一四、一〇〇	六、八〇〇	四、九〇〇	五、四〇〇	四九、〇〇〇

三、一ヶ年間の支出調査

年次別	食需品	生産資金	金利	諸税	光熱	衛生	被服	教育	其他
昭和十一年	三六、七六六	二四、六六六	八、七〇〇	七、七七一	五、三五〇	一、五六〇	七、五三〇	三、三三〇	二、三〇〇
同 十二年	四三、七九二	三八、六六五	八、五〇〇	八、二五〇	五、六六〇	一、四二〇	七、八八〇	三、三九九	一、五六〇
同 十三年	五九、九六二	三三、五五〇	七、九〇〇	八、五六〇	六、二〇〇	一、〇五〇	八、一〇〇	三、六〇〇	一、四三三

右のやうな調査を全村各戸に亘つて團員が毎年實施し、それを各支部でまとめ更に村全體にまとめて集計し、現はれた數字により綿密なる比較検討をなし、常に各農家の更生し得ない根本原因を追究したのであつた。そして労働能力と土地との關係土地と人口との關係其他收支狀況から

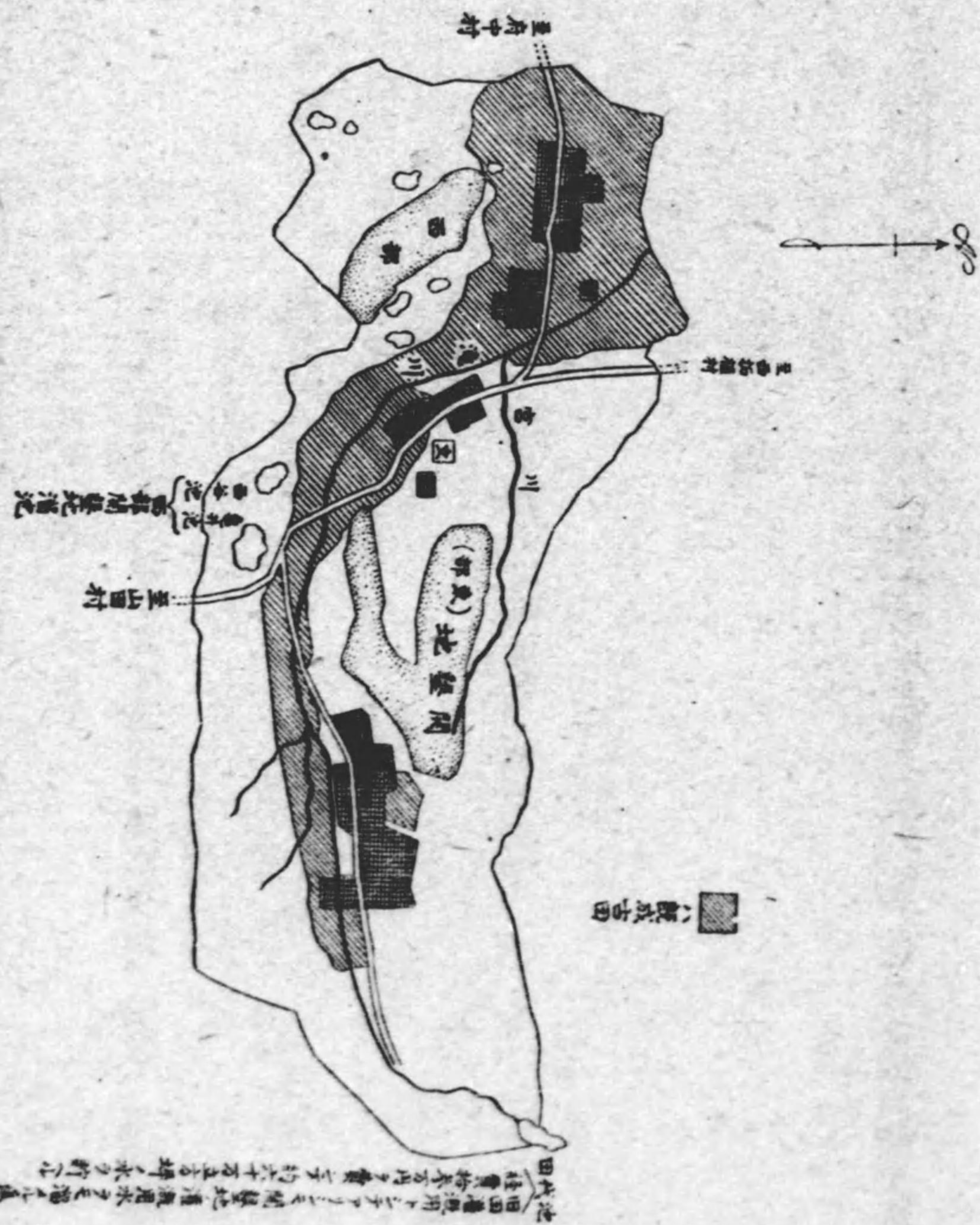
經營全般に亘り詳細なる研究調査の結果別掲の圖の如き開墾計畫を樹立し、新農村の建設を圖らうとするものである。

青年を中心とする開墾事業に關しては、大體以上の如きであるが、この大開墾事業完成後の健全なる村の發展を期すると共に、將來村を背負つて立つ青年に對し、徹底したる皇國農民精神を涵養し、併せて開墾地に於ける農業經營の先驅たらしむるために、昭和十三年建設費二萬圓を支出して村營特設農場並に之に附設して神農塾を創設した。

この農場は春日農場と稱し、第一期事業（昭和十三年度より向ふ五年間）として原野五町歩を開墾し（内水田二町歩、畑三町歩）先驅的活動により一般村民の模範的、指導的經營をなさんとするもので、場長は村長之に當り、教育部長として青年學校長を、農場主任として青年學校専任教員が當つてゐる。農場は其の一部を青年學校生徒の修練實習地として、利用することゝなつてゐるが附設された神農塾と密接不離の關係にあり、大部分は塾生によつて經營されてゐる。

次に神農塾の目的とする處は、農場を中心として實習勞作による訓練及び皇國農民道の陶冶を重んじ、以て皇國の興隆と郷土振興に貢獻し得る信念と實力を有する農村青年を養成するにある

二 東部開墾予定地 五十町歩
西部開墾予定地 四十町歩
計六十町歩



此圖は春日農場に附設する神農塾の位置を示すものである。春日農場は春日川に沿つて開墾され、神農塾は春日農場の中心部に附設される。春日農場の面積は六十町歩である。

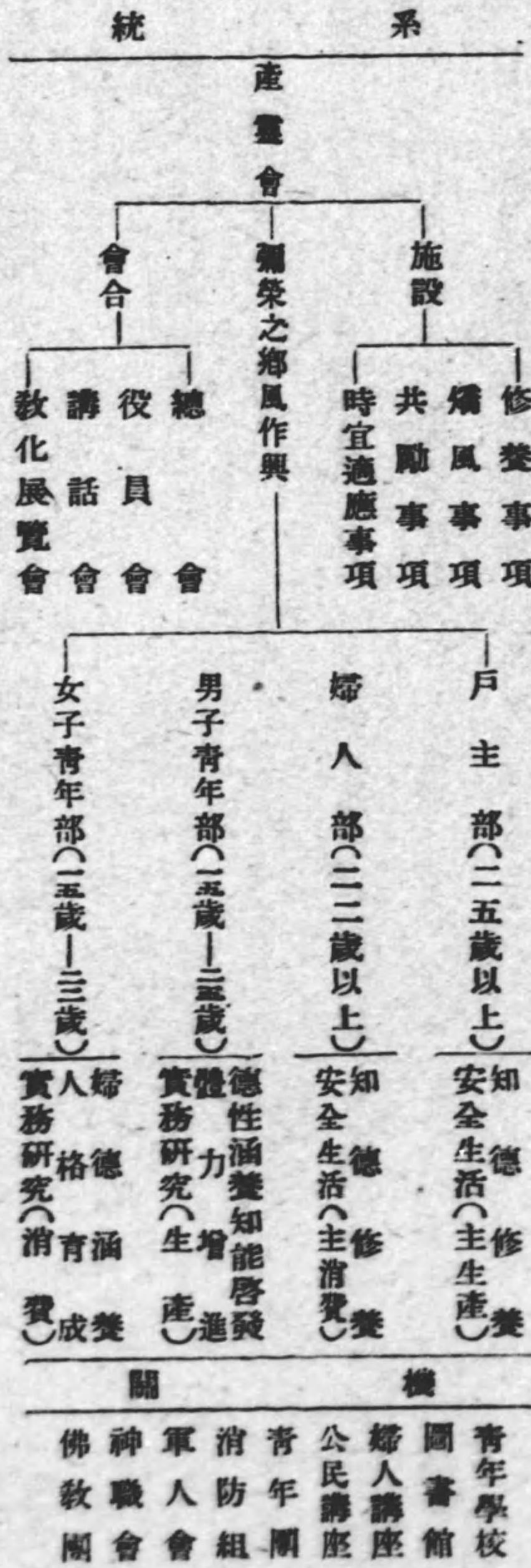
のであつて、塾生は一ヶ年間に亘り寮舎に入舎し、講師と共同自治の生活をなし、農民魂の涵養に努めることとなつてゐる。毎日の日課は次の通りである。

- 一、午前五時 起床、禱、皇大神宮宮城遙拜、國旗掲揚、唱歌、皇國運動
- 一、同 七時 朝食
- 一、同 八時三〇分 作業又へ學科
- 一、同 十一時三〇分 中食
- 一、午後一時 作業
- 一、同 五時三〇分 唱歌、皇大神宮宮城遙拜、國旗降納
- 一、同 六時 夕食
- 一、同 七時 自習
- 一、同 九時 靜座、朗唱
- 一、同 九時三〇分 就寢

尙、この村には眞に村民一體となつて、村の強化進展を圖るために、村内各種團體を統合して

産靈會が結成されて居り、青年團も男子青年部として、其の組織内にあつて積極的活動をしてゐる。其の系統は次の如くである。

壬生野村社會教育施設要覽



青年部の昭和十四年度に於ける經營方針は

一、皇國精神を高揚すること。

尊皇、敬神崇祖は皇國精神の源泉である。青年たるものは此の精神の發揚に努むるために、

毎日宮城を遙拜し又神佛を禮拜すること。

一、堅忍持久の精神を鍛錬すること。

長期建設興亜の道は忍苦によつて達せられる。

堅忍持久、困苦缺乏に耐へることは、現下時局に處する道である。耐久作業、耐暑耐寒の鍛錬をすること。

三、銃後の任務に精勵すること。

皇軍の意氣は國民の熱誠によつて擧る。

銃後にあるもの殊に青年は、従前以上に出征軍人及家族に對し、慰問や奉仕をなして、後顧の憂なからしめるやうに努めねばならぬ。

四、自己の職業に誠心奉公すること。

日々の業務は必ず研究工夫によるものでなければならぬ。日々仕事の増加を圖りたい。

五、健全生活を實踐すること。

早起、定時勵行、時と物とを無駄にせぬこと。短髪、所定服装勵行。

六、産靈會青年部の綱領の再吟味

徳性涵養—自然協同心の養成、質實剛健

男子青年部

智能啓發—青年學校出席督勵

體力増進—積極的鍛錬

實務研究—農業智識の啓培、副業の研究

であつて現在七十五名の部員を有し、どこまでも村の中核となり、先驅となつて活動に努めて居る。

以上に依つて知れるやうに、この大開墾事業貫徹のため、あらゆる機關を動員し、あらゆる施設を擴充強化し、村民一體となつて、遂行の萬全を期してゐる。

組織と統制ある勤勞開墾

三重縣安濃郡神戸村青年團

昭和十一年十月三重縣では輝しい皇紀二千六百年の記念事業として、青年勤勞報國運動が起されたのであつた。そして全縣下の青年團が縣より指示された方針に基いて、この青年勤勞報國開墾事業を実施するに至つた。

神戸村青年團でも直ちに團員の心からなる發動を促し、一日も速に之が實施をなさんとした。その時に當り本村長亦深く本事業に賛し、村有志に圖つて之が贊助を求めたところ、何れも農村に於ける好適の記念事業なりと、立所に實行協議が成立したのであつた。

然しながら土地及び場所について種々意見があつたのであるが、本村は隣村に接續した瘠地ではあるが、將來開拓を待つべき廣大面積の山林あるを以て、本事業として此所に模範的開拓を起

し一般村民に先鞭を附することは、本村としては記念事業にも増して有意義なりとの見地から、現在地を下して昭和十一年十月十八日之が買収を行ふこととなつた。

こゝに於て本團員は青年團地として買収する村當局の好意に感激して、團基金を提供する等誠に喜ばしい氣配が醸成せられた。かくて所有主亦記念事業とこの氣配を見て、奉仕的安價に土地の提供を見るに至り、昭和十一年十月二十五日本團記念事業地として、一志郡久居町字大釜に總計八反五畝八歩（實測面積一町八畝二十一歩）之が價格壹百六拾圓を以て購入し愈々實施に取掛つたのであつた。

一、事業地の概況

この意義ある開墾事業地は神戸村に隣接せる久居町の地域にあつて、伊勢磨砂の鑛脈に屬する關係上、所有者は磨砂採掘を第一目標として、地上の利用の如き餘り重視して居ない點より、山林としても又開拓利用等には全く無關心の状態である。従つて本村民はまだ一度も開墾を試みたこともなく、唯一少部分に遠く安東村邊から桑園利用のため開拓試植を行つたこともあるが、餘り遠隔のため、良結果を見ず、現在は荒廢して僅かに一部の残れるを見る状態である。

全面小松林にして中には採砂のため上層部が没落して、ために山形の崩れた箇所すらあつて之が整地には相當困難を感じる所もあり、村民としては外形上開墾困難の點を見て今日に至るまで何れも試みるものがなかつた。

現在本團の開墾地は北部一帯は前記採砂のため陥落して居る所もあるが、大部分はまだ採砂を行はない比較的良好の土地である。

距離より見ると少し遠隔の不便はあるが、本村各支團よりの略中央に位し作業上の不便は差して大なることはない。

向地勢は稍々南面に傾斜した處で、地質及び土質としては洪積層の壤質殖土となつてゐる。

二、作業着手迄の諸準備

- 一、昭和十二年十二月十日より地上松の木の伐採作業を行ひ同月二十日迄に全部伐採を終る。
- 二、同年十二月二十三日本縣聯合青年團總會天歛授與式に代表者參會天歛授與を受く。
- 三、同日團員一同村界に天歛を奉迎し共に氏神に至り拜受並に宣誓式を行ふ。
- 四、開墾作業出動に關して總會を開催して誓つて本事業の達成を約し左の勤勞割當をなす。

一日一回の勤勞人員 一五人 各支團五名宛。

勤勞時間 午前八時より午後五時まで。

晝食は本團に於て材料準備し炊事當番調理すること。

人員の出動割當及び通報は支團長に於て各支團毎に定め本團は作業日時を支團長に通知する。

五、用具調製

天 歛 一 授與

開墾 歛 一五 一挺三圓四十錢

鋸 一

歛 各自携帯

湯沸、藥罐 一 村のもの

く ど 一

作業場 一 最初は移動式組立小屋九尺一間のもの現在二間九尺堀立小屋經費六〇圓
炊事用具一切 學校のもの

六、經營の狀況

- 一、宮城遙拜
- 一、國旗掲揚
- 一、誓詞訓話
- 一、作業開始 午前中一回休憩
- 一、午 餐 炊事當番湯沸し、食事運搬
- 一、休憩時 座談會、講話、軍歌合唱、農事雜談
- 一、作業開始 午後一時 休憩一回
- 一、終 了 午後五時
- 一、解 散 用具整理、講評、歸校、團長訓話

以上に依つて行はれた既墾地の經營に當つては開墾當初の事として地味肥沃ならざる爲、地力の増大に努め、一方青年團員の研究地として青年學校實驗農場又は小學校實習地として其の經營を行つてゐる、その一例として陸稻の栽培狀況を記すれば次の通りである。

陸稻栽培

- 一、目的 開墾地に於ける陸稻の生育狀況を調査し其の適應性を試み以て陸稻栽培の方法を知らしむ。
- 二、品 種 農林糯一號
- 三、栽培面積 八畝歩
- 四、播種期 五月八日
- 五、肥料

種 類	反當施用量	施 用 方 法
鶏 糞	三〇	基肥トシテ施用
過 磷 酸 石 灰	八	〃
草 木 灰	〇	〃
硫酸アンモニヤ	三	液トシテ補肥

六、收穫期日 十月二十七日

七、反當收量 四斗三升

七、經費收支の狀況

開墾初年度（昭和十二年）に於ける收支狀況は次の如くである。収入は年と共に漸次増加しつつあり。

収入の部

陸稻四斗三升 賣却代	八、〇〇
生大根百貫 賣却代	四、〇〇
切干千切大根 賣却代	一一、二〇
大根 漬 賣却代	一五、〇〇
其他試作物 賣却代	三、〇〇
合計	四二、二〇

支出の部

開墾鉄十五挺新調費	五一、〇〇
-----------	-------

作業場新設費	六〇、〇〇
勤勞奉仕團員食費	一一三、九九
肥料種 苗費	七二、三八
設備其他諸經費	二〇、一〇
合計	三二七、四七

八、事業施設と共に行ひたる修養事項

- 一、開墾地を神聖なる青年道場として作業前後に行ふ修養行事と團體訓練。
- 二、午前午後及び晝食休憩時に行ふ産業講話及び修養産業座談會。
- 三、作業は唯單に開墾を行ふのみの作業でなく鍛鍊的、行的訓練であり特に作業中は絶対無言の行であり決して勝手な言語動作を許さず。
- 四、開墾作業が時間的鍛鍊なるため勤勞に對する自己の體力を知り家庭作業に従事するも勤勉となつた。

九、村其他に及ぼした影響

- 一、村民の青年の力の偉大なることを知り得たこと。
- 二、開墾事業を誘致して續々行ふ者を生ぜしめたこと。
- 三、團長を先頭に本團各指導者は交代して作業に服し團員の指導と其の督勵に努めたこと。
- 四、村長始め各大字區長は午後休憩時に茶菓を出し又作業實施中現地を巡視團員の慰安と督勵に努めたこと。

一〇、其他各種團體との關係

本事業開始當時其の成否を疑問視しつゝあつた村内各團體其他關係者も、團員の決死的作業の熱心に動かされ、本事業の完成に對し常に協力に努めてゐる。

一一、將來の計畫

- 一、本村耕地の現狀に鑑み開墾地成否は一般注視的となりつゝある現狀であるが、青年團及び青年學校中心に農場經營に當り、特に考慮を致し村の模範農場として經營を行ふ。
- 二、農場としての施設の充實を計ると共に宿泊所を建設し、青年の修養鍛鍊道場とし勤勞を通じて精神教育を行ひ建國の大精神を闡明し、勤勞尊重共同一致の精神を培養せんとす。

三、新開地なるため有機物非常に缺乏し之れがため作物又完全ならず、依つて地力の増進を計るは最も必要であり津市の塵芥を施用し地味の肥沃に努めんとす。

四、經濟的經營に中心を置き收入の増加と地力の増進に努む。

尙この開墾地に於ける團員の青年生活の一端を知るために「戦線の友に送る」一文よりこれを窺ふこととする。

戦線の友に送る

N兄

昨日は寫眞を有難う、大手をひろげて戦友の肩を抱きながら大笑してゐる君の鬚面を見て僕は心から安心した。

君！ どうやら君は戦地でも君一流の調子でやつてるやうだね、ジャン／＼突撃して、支那兵の素つ首を五ツ六ツ手土産に凱旋されんことを祈つてゐる。

暫くいろ／＼な事に追はれて、思ひ乍ら君に筆を執らなかつた。今日は一つどつしりと部厚い便りを書くことにする。先づ第一に君に傳へて喜んで貰ひたいことは、君があればど心にか

君の全生命をなげうつて育てられた吾が村の青年團が、君が出征後、君の志に背かず立派に君の素志をついで、全團員歩武堂々活躍してゐることだ。そして縣の青年勤勞報國運動に従つて、更に積極的に勇ましく進軍し出したことだ。

一、建國の大精神を闡明し、勤勞尊重、共同一致の精神を培養せんとす。

一、愛郷心を鼓舞し、産業報國の實を擧げ、地方自治の發展に資せんとす。

一、進取敢爲事に耐ふるの氣象を助長し、質實剛健なる風尙を作興せんとす。

この三つの項目は、君が知る本縣が「皇紀二千六百年記念青年勤勞報國運動」のために掲げられた一大スローガン、我等銃後青年の進みゆく道を示した大きな旗印なのだ。

君が心身をなげうつて育てられた我が村の青年團も勿論一人ももれなく旗印の下に集まつた。勇ましくね、そして若い意氣と熱情とをもつて、荒蕪地開拓といふ大きな仕事に手をつけ出した。「村の瘠地を青年團が模範的に開拓し、一般村民によい先鞭をつけることは、本村として何よりも有意義な記念事業だ。村は村全體として賛成し、後援する……」さういふ意味で村長始め村有志の方々のお骨折の下に、八反五畝八歩（實測面積一町八畝二十一歩）の土地が昭和十二年十月

二十五日僅か百六拾圓で青年團地として買入れることが出来た。

君も知つてる磨砂をとるあの松林、所々、磨砂をとつた跡が大きく没落して、子供の時兵隊ごっこや、かくれん坊にこの上もないいゝ遊び場所だつた。誰もこゝにもものなんか植えて見やうともしなかつたあの荒地が、君、君の出征後半歳とたゝない中に我等村の青年團のメツカとなつたのだ。

そこにたてられた組立式の九尺一間の堀立小屋が我が青年團のすべての畫策の根源地青年團運動の發動地となつたのだ。

N兄

こんなことを君は夢想してもみなかつたらう。あとできけば村の有志や幹部の方でいろ／＼前から計畫があつたのださうだが、君の出征の時までには一向具體化されなかつたのだ。

想像してくれ給へ、あの樂しかつた地ならし作業、僕達はみんな笑つて、歌つて、十二月十日からたつた十日間であそこに生えた松を全部ぬいてしまつた。そして二十三日には本縣聯合青年團總會の天鋳授與式に代表者が授與された天鋳を、一同が村界まで奉迎し氏神様で拜授、本事業

が完成するまで、各團員全部、誓つて團の命令に背かないことを厳かに宣誓したのだつた。それからすつと一日一回十五人の團員が午前八時から午後五時まで必ず割當てられた通りに働いた。

天 鋏 一挺 授與 開墾鋏 十五挺 鋸 一挺 鋏(各自携帯)湯わかし薬罐

一箇(村のもの) クド 一 炊事道具(學校のもの)

これがこの回天の事業をはじめにあたつて整へられた道具だ。九尺一間の小さな堀立小屋、これがこの事業の本部であり、根據地である。

では、どんな具合に仕事をしてゐるか、それを傳へやう。午前七時半までに、當番團員十五名は、懐しい小學校へ鋏をかついで集る。支團長が出席を記入してから、八時現地に集り、嚴かに神宮と宮城を遙拜する。國旗はスル／＼と我等が聖地高く揚がり、皆一様に嚴肅な氣持になつて國旗に敬禮する。手短かな誓詞や訓話が朝の冴えた頭へ快くしみ込む。

誰だつて、僕等が、僕等の手で……と頑張りたくなるよ。十時頃、軽く休んで、お晝まで、また黙々と働く。これは單に開墾するといふだけでなく、目的は我等身心の鍛錬にあるのだから云ふまでもなく、絶體無言で勝手な言動は許されない。でもみな眞劍だからさういふ禁止がなくと

も、ひとりで無言で黙々と働いてゐる。

神聖な労働といふことが、誰にもしみ／＼感じられる。いや／＼ながら父兄の後について働いたあの頃となんといふ違ひであらう。「あゝ働く、働くのは嬉しいものだね」と。君も知つてゐるあの札付きのお洒落者のO君が、この間、僕の肩を叩いて述べた。この頃O君は髪も五分刈にしてしまつたし、ヴァイオリンも捨てたし、例の絹の首巻もしなくなつたし、手も硬くなつたよ。君が憤慨してゐた以前のO君とはまるで變つた。これによつても僕達が銃後を護るべく、どんなに眞面目に張り切つてゐるかを察してくれ給へ。

お晝は素晴らしく楽しい。當番をきめて、飯も、菜も、皆自分で作る。假令シンのある飯が出来たつて僕等は「朋友めし」——朋友シン(信)あり——といつて歓迎するし、里芋がからすぎても、一鍋や二鍋は一寸笑つてゐる中にまた／＼なくなつてしまふ。一昨日F君が雞を一羽しめてくれた。學校園から寄附の新ジャガ芋と煮てくれたが、僕達はこんな素的な料理は今まで口にしたことがない、十五人が一致して證明したよ。もつとも雞は芋やねぎの間にかくれん坊をしてゐて探すのに一寸骨が折れたがね……。

その雞腹で、S君が得意の詩吟をやつた。

古陵の松柏天廳に吼ゆ

S君の朗々たる吟聲は、僕達の心魂をさらつて、目路遙かに續いてゐる、大豆、大根の畑を越え、君のところまでとどいたんじやなかつたかしら。

愛國行進曲や、露營の歌は皆一緒に大聲で怒鳴る。動けなくなる程いつばいになつた腹すかしにはもつてこいなんだよ。でも、晝休みはかうして遊んでゐるとは限らない。時に青年その他の本の輪讀會、座談會、農事雜誌などと鹿爪らしいこともやる。

三時頃、また一寸休んで、五時終業。用具を整理し、講評や團長の訓話をうけて解散。

充實した楽しい一日！だから團員は誰もみな割當當番の廻つてくるのをお義理でなく、しんから楽しみにして待つてゐる。あれに出ると、出れば出る程自分が磨かれて行くやうだと、皆が異口同音にいつてゐる。

笑聲も、合唱も、勿論講話も訓辭も、みんな僕達のほんとの糧になる。

共同一致、勤勞尊重、我れは國家の有力な一つの骨子だといふ自覺、かういつた青年に必要な

覺悟、精神は不知不識の間に養はれてゆく。

もう自分は昨日までの自分ではない——。

新しい生命のいぶきを浴びて、しつかりと大地に足をつけて立つた我等の青年團。

N君、想ひみてくれ給へ。君が育てた青年團はこんなにも立派に歩み立つた。君の念願は正しく遂げられた。

固くガツチリと一つに結んだ青年團、青年道場、共同勞作！、これは君の永年の理想、いやあの頃の様子では夢想だつたねえ、これが君、その君さへが思ひがけない程に素晴らしく實現されたんだ。

團員一致して拓土建設に邁進

廣島縣比婆郡小奴可村青年團

五十年この方、心あるものが成さんとして成らざりし小奴可村平和郷土建設のため、奮起した青年は、こゝに一大事業を興し、青年の勤勞を通じて精神的統一を圖り、一方村民をもこの舉に参加せしめ、意氣統合によつて舉村一體の實を擧ぐると共に、更に産業經濟の根本を確立せんとし、併せて皇紀二千六百年記念事業として興亞の世紀に輝しいこの拓土建設の活動が行はれるに至つた。

一、村と青年團の概況

小奴可村青年團がこの拓土建設の計畫を樹立して、舉村一致して着々實績を擧げつゝあるその活動狀況を記す前に、先づこの村のあらましと本團の大體を記することとする。

1、小奴可村の概況

小奴可村は廣島縣の東北隅にあつて、東は岡山縣に、北は鳥取縣に接續し、周圍の村界線は悉く連峰山脈を以て境して居る。その山脈の内部にも幾多の獨立山があり、その山脈又南北に延びて、其の形は恰も二重の階鐵を置きたるが如き觀である。従つて本村總面積の十分の七は山地であつて、耕地並に宅地は溪谷川流の左右に沿ひ隨所に展開して居る状態である。故に平坦地少く地盤も高低一ならず、大小道路又坦路なく交通不便の地である。

斯の如き地勢を有する小奴可村は、廣袤六方里にして氣候寒冷の地である。戸數六百八十戸、人口三千五百一人にしてその八割は農業に従事し、水田四百三十一町歩、畑六十五町歩を耕作してゐる。林野は三千七百六十九町歩を有し副業として製炭が行はれてゐる。主なる農産物は米、麥大小豆、蔬菜等にして林産物中木炭は數量品質共優秀なるものとなつてゐる、其他畜牛の飼育又盛である、教育も地勢上自ら三區の學區に分れ、各部落毎に三小學校を有して居る。

以上のやうな地理的概況を有する本村の農民は、敬神崇祖の念厚く、勤勞愛好貯蓄心に長じ、愛郷心に強く進取の氣象に富むの長所があるが地勢の關係上古くから部落的觀念強く、自己反省



の念に乏しく、時間尊重、規約勵行の念薄く、村政上相反目し圓滿を缺くの短所がある。

2、青年團の概況

明治四十年四月從來の小奴可興風會、内堀一水青年會、千鳥青年會を併合統一して小奴可村青年會を組織したるを嚆矢として、大正二年四月小奴可村青年團と改稱し、小學校通學區域に従つて三支部を設け、村内三小學校長中より一名を團長に他の二名を副團長とし、支部長は各支部毎に團員の互選により統轄せられてゐる。

本團の目的とするところは、農村青年をして皇國の精神を徹底せしむると共に、各自の修養研鑽に努め併せて身體を鍛鍊して健全なる公民たるの素質を作るのにあつて、其の組織は三支部より成り、各支部に修養、體育、奉仕、文藝、會計等の各部を設け各主任を置き之が活動の統制連絡を圖つてゐる。主なる事業としては二千六百年記念事業を中心に各方面に亘り活動してゐる。

團費は負擔金、村補助金並に共同作業による収益を以て充當されてゐる。團員は時局の影響により減少してゐるが現在百四十六名あり。

二、拓土建設の動機とその經過狀況

1、動機



作 業 状 況

地勢上村内に一大峠を有して居る本村民は、その峠を境界として東西兩派に分れて、古來より抗爭を續け、部落觀念の強き短所を助長し、村の自治教育上誠に面白からざること多く、常に心あるもの憂慮される處であつた。

然しながら今日に於てこの村の現狀を打開し和協一致新興小奴村を建設しなくてはと、茲に政治、經濟、思想の一轉換を期して一大事業を興し、そして村内一圓の青年をこれに勤勞奉仕せしめ、流汗淋漓、苦樂を共にする事により先づ精神的統一を圖り村の將來發展の礎石たらしめんとし、更に村民一般にこの大事業を後援々助けしめる事に依つて、若人の意

氣に統合せしめて舉村一致の平和理想郷土を建設せんとする物である。尙之を具體的に記すると
一、過去五十年間歴代の村長が、平和郷土小奴可村建設に、そして更生農村小奴可村の建設に苦心せられた跡極めて多きものがあつた。偶々日支事變勃發となり、更に昭和十三年度から經濟更生指定村となり、愈々實施期に入るに當り、歴代爲政者の意志顯現に好機なりと考へたのであつた。

二、過去五十年間本村の村議會は常に抗爭すること多く、村民又議員と共に人心東西に分れて抗爭し、人質極めて悪化せる現狀に際し、茲に自治制發布五十年祝典に當り、畏くも御親臨を仰ぎ優渥なる御勅語を賜り、御聖旨に應へ奉る好機なりとした。

三、紀元二千六百年奉祝秩父總裁宮殿下の令旨を奉戴するに、「世界の大事は一轉機を見んとす」と給ふを拜し、本團でも之を記念とし、平和更生村に轉換せしめんとするものであつた。

四、本縣知事の二千六百年記念青年勤勞報國運動の聲明書が發せられ、寶祚無窮の聖德に應へ奉り、肇國の聖旨を奉戴して、開墾拓土に従事し村の開發に寄與せんとした。

五、支那事變に際會し銃後の生産擴充は實行力に富む青年の覺醒奮起に俟つ他なしと思慮したのであつた。

2、目的

村内の平和を樹立することに依つて、村經濟更生の根本を樹立し、併せて精神的教化を計り、政治、思想、社會問題及び經濟の一轉機を加へんとするもので、教化の實現は先づ青年の實踐を通じて一般村民に及ぼさんとしてゐる。

3、計畫

- 一、村内抗爭の原因である地勢上の一大峠をなす矢子ヶ峠縣道の切下の實施。
- 二、その峠附近に於て稍村内の中央に一大集團地十五町歩を購入し、青年の修養道場建設の實現（現在三校の青年學校を統一獨立校舍を建設せんとす）
- 三、同地に銃後の護りとして無言の凱旋者に對し、靖國神社を設け、年一回の追悼會を行ふ。
- 四、同地に將來社會情勢の進展に伴ひ、小學校五年以上合併高等小學校の創設の企圖。
- 五、同地に重要農産物の原種を育成し又村方針の優良果樹苗の育成配布。
- 六、同地に開墾と同時に種牡牛の育成所を設置せんとす。（この地方に於ける家畜の飼育は部落

の實情よりして最も重要なものである)

- 七、同地に稚鷺共同飼育所を設け、本村の蠶業の振興を期せんとす。
- 八、同地に勤勞報國運動のため合宿所を建設し、以て道場組織をなし青年學校義務教育の完成を期す。
- 九、同地に遠き將來に於ては各部落神社の合併をなさんとす。
- 十、村内一圓の會合場の設備をなさんとす。

4、實施方法

- 一、集團地は過去三十五ヶ年前の小學校兒童(現在の中老者)が流汗致密の努力によつて、蓄積したる金四千圓を投じて之を購入し、現時の青年は之を拓土建設し、將來の青年は之を培養するの義務を有する祖先崇拜の實地教育場たらしめんとす。
- 二、開墾拓土者は主幹を青年團員とし、父兄は之に應援をなし完成せしむ。
- 三、建物等の工作物は戸主より物質の寄附によらんとす。
- 四、開墾に要する資材は本村出身にして村外居住者より寄附により調達するものとす。

- 五、經營に要する諸費用は開墾地の收入及び開墾地に對する補助費を以て之に充つ。
- 六、本計畫の竣工を五年乃至八ヶ年後とす。
- 七、青年の勞働能力は一人平均年十二日より二十四日出動するものとす。

5、工事計畫説明

一、工事施行前後の地目別地積

地目	工事施行前地積	工事施行後地積	備考
水田			溜池ヲ作ルトキハ八町歩ノ水田ヲ得
畑		五町歩	
宅地其他耕作物		二町歩	
山林	二反三畝二十二歩	二町歩	
原野	五町歩	三町歩	採草地モ含ム
計	七反三畝二十二歩	一反二畝歩	

二、事業の經營方法

經營者名	開墾後ノ地目	地積	植栽スベキ作物名	備考
專屬農夫(夫婦二人)	厩舎敷地	畑一町歩	種牡牛家禽飼育	採草栽培
専任教員中堅青年專屬十人	合宿所			經營者ノ主任トス
男子青年下級學年		三町歩	栗園	
男子青年中級學年		三町歩	優良耕種苗圃	
男子青年上級學年		三町歩	前二毛作物	
女子青年下級學年	稚置共同飼育	一町歩	農産資源作物	
女子青年上級學年			稚置共同桑園七反	家禽ノ飼育ヲ併課ス
女子青年上級學年		同三反		

三、工事の年度割

種別	第一年度	第二年度	第三年度	第四年度	第五年度
開畑	三町	一町	二町	二町	二町
農道	一〇〇間	二〇〇間	一〇〇間	一〇〇間	一〇〇間
建築物	厩舎	合宿舎	青年學校	家禽舎	稚置共同飼育所

四、工事明細書

開畑地積 十町歩(三萬坪耕転豫定一切を含む)
 一人二日ノ工程 男女平均三坪二合五勺
 出動人員總數 九千三百人

名稱	地積	反當人數	總人員	男女別
拔根除去	反三本程度ノモノ二町歩内外	一五人	三、〇〇〇人	男
荒起	一〇町歩	五〇	五、〇〇〇	男
地盤拵及階段畑	五町歩	四〇	二、〇〇〇	男
表土拵	一〇町歩	三〇	二、〇〇〇	女
計		三三	九、〇〇〇	男 七、〇〇〇 女 二、〇〇〇

6、経過状況

以上の計畫は昭和十三年六月十七日樹立され同年七月起工、同年十二月に至り着手現在となつてゐるその経過状況は次の通りである。

昭和十三年二月十一日 富田廣島縣知事の聲明

同 四月二十九日 廣島縣武徳殿に於ける廣島縣起工式天歛、天鎌拜授

同 六月十七日 計畫樹立

同 七月四日 矢子ヶ峠に於て宣誓式並に起工式舉行

同 七月二十五日 計畫書縣の承認を受く

同 八月十三日 實施豫定地測量着手

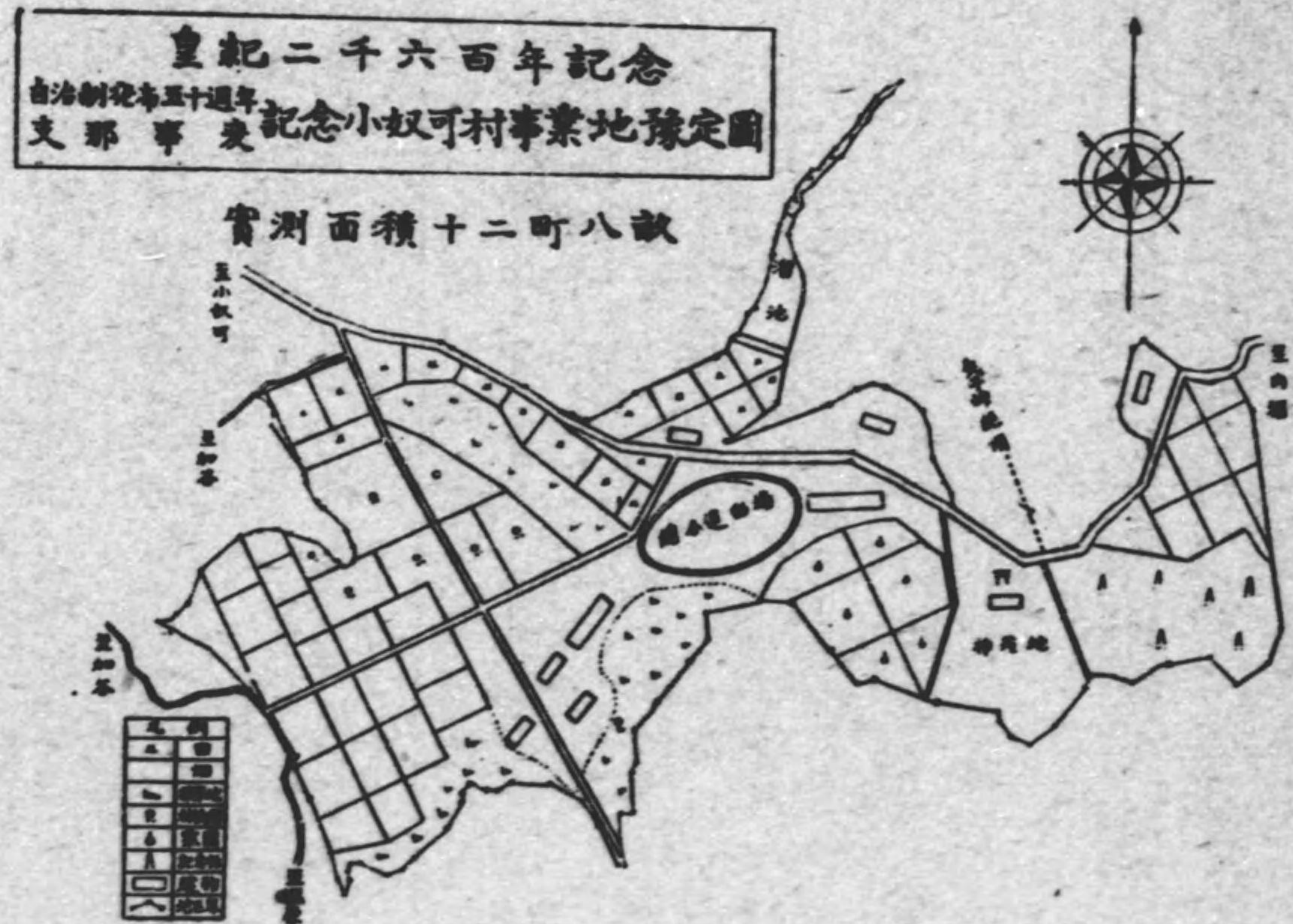
同 九月二日 右測量終了

同 十二月十一日 事業着手

備付帳簿

記録簿、資金寄贈者芳名録、材料寄附者芳名簿、諸材料徴收簿、會計簿、工具臺帳、奉仕出缺
勤簿、青年團員出動簿、戸主會出動簿、婦人會出動簿、日誌

以上の準備を整ふるまでに、本村出身者にして村外居住者より、鎌、鋏、手拭等寄附を申出るもの多數に上り、又材料の寄附を申出る村民もあつた。愈々十二月十二日南京城陥落の記念日を卜



して、實測の面積十二町八畝の原野に、團員は日章旗を染め抜いた手拭を鉢巻して、鎌鍬を手にし團長を先頭に歩を進め、山上高き國旗掲揚臺を仰ぎ、遙拜所に整列して、遙拜、黙禱、訓示を受け、六班に分れそれ／＼感激の拓土の第一歩が踏み出されたのであつた。

作業地の一丘に竿上高く紫地に白を染め抜いた「耕大地併而拓其心」作業旗を押立て、流汗淋漓、和衷協同、奉仕監督者の指揮に従つて、西南向の僅かに起伏せる原野に穿鑿、運搬、抄把等と開拓の歩は次第に進捗せられた。午前八時より午後四時半、夜の張のおりる頃、はるかに美古谷連峰の夕焼を眺めながら、原野即ち戰場、作業即ち戰鬥の意氣で終日奮闘してゐる。鎌、鍬を休憩所に納め、國旗降下、作業旗降下の後、講評を受け解散するを日課としてゐる。

作業間の休憩及び晝食時の休憩は作業地の入口の近くにある間口七間與行二間半の「二千六百年記念小奴可村聖業地休憩所」と題せる看板を掲げた神武創業を髣髴とせしめる藁葺堀立小屋に一同集合し、爐を圍んで喫茶、抱食し、食後は屋内に掲げてある青年團綱領を唱和する。その他種々な標語を齊唱して精神の糧としてゐる。

大地を耕し併してその心を拓く作業旗の文句にそむかず勤勞し、昨年三月三十一日までは毎日

團員交替にて出勤してゐるが、其後も計畫に基いて着々實施してゐる。着手後間もなく村内の父兄もこの舉に感じ村長、團長の聲明に應じ組を別ちて援助し、又婦人會員も同様出勤援助せられてゐる。

三、勤勞奉仕活動の現状並に実績

開墾作業は以上の如くに運び、開墾地面積も既に二町歩に達したるため、昨年四月には之が經營上の事業豫定計畫に従つて、軍需資源としてのラミー栽培を試み、四百圓を投じて苗を購入栽培せられた。恰も稀有の早魃に禍され假植にとじまれるものもあつたのであるが、枯死せるものなく本年は二町歩全部にわたり擴張増植の豫定で、堆肥の製造をなすため地區内採草地より草を刈取り増産に努力してゐる。

敬神崇祖の國體的精神涵養上、開墾せる地上の最上位に献穀畑を設置し、團員奉耕謹作してゐる。尙昨年度は冬季團員作業中試作用として、甘藷を栽培し相當の成績を収めてゐる。

年次計畫の豫定中にある合宿所の建設は急務を要するため之が建設に努めた結果、篤志家の寄附により鐵道官舎二軒を分與され、早速團員が共同して之が取壊しをなし、運搬も完了し昨年末

建設の運びとなつた。尙初年度の豫定である厩舎の建設を變更し、昨年四月より計畫の一である青年學校の統一が實現し、専任教員三名の任命を見るに至つた。目下假校舎にて教育せらるゝの現狀であるため、青年學校建築の急なるを認め、青年勤勞作業地に之が獨立校舎建設の議起り、既に村會の決議並に設計等完了し、昨年末位置の決定も終り合宿所と共に建築の運びとなつたのであつた。將來この一大事業をして青年團員及び青年學校生徒が繼續して、實習地として經營し逐年開墾所期の目的實現に一層の決意を固むるに至つた。

尙昨年度に於て栗園三町歩の植付豫定地の地拵をなし、今春植付の豫定にて既に苗木の準備も出來てゐる。他面青年の手に直接よらざるも東西抗争の原因をなす矢子ヶ峠切下げ工事も昨年末完了し、着々計畫の進展を見、精神的團結も融合も動機の初一念にもとらず、理想郷建設に邁進してゐる。

五、勤勞の成果

時局下に奉公の誠を捧ぐる一般村民は、日本精神發祥である紀元二千六百年記念のこの舉に對し、青年を督勵、應援、出勤、寄附等あらゆる協力の賛意を表し、特に本村更生の痛となつてゐる

た村民の精神的融合統一をなすべき、大衆的教育教化機關としての青年學校を獨立建設し、村内青年を一同に教育することにより、その道場として、この聖業地完成を期さんと流汗淋漓土に親しむ筋肉運動、勤勞奉仕により、神武聖業の深遠にして二千六百年の今日より聖業を偲び奉り、祖先崇拜、愛郷の精神涵養に資せんとするの民狀を醸成した。

勞力奉仕班の活動

静岡縣小笠郡大淵村青年團

洋々たる遠州灘の荒波磯を洗ふ邊り大淵村がある。南に太平洋、北に靈峰富士を仰ぐ所謂白沙青松の地にして、戸數四百五十戸、人口三千六百ばかりの純農村である。

昔ながらにして純朴な本村青年團はこの地方には又めづらしく産業活動の旺盛な團で、古くから農事研究会（現在の産業部）などを組織して、郷土産業振興に努力されて居た。昨年度大日本青年團より共同研究助成金を交附せられた位で、特に一人一研究や共同研究が熱心に行はれてゐる。

以下記さんとする事は、本團が今事變發生と共に銃後の完璧を期するため、勞力奉仕班を組織し、應召農家に對する勞力奉仕の徹底を圖ると共に銃後産業振興の中核となつて居る勞力奉仕

班の組織ある活動状況である。

一、勞力奉仕班の起因

東亞に風雲捲き起り、皇國起つて暴支膺懲の鋒をとるや、本村からも數多の勇士を戦線に送り出した。戦局の發展、國を擧げての長期持久戦への移行と時局の進展に伴つて、青年團の任務を達成せんがためには、團員の一層の努力と覺悟、そして深き時局の認識が必要であることを痛感したのであつた。それと共に幾多征旅にある郷土勇士の心を心として、團員一致團結如何なる艱難辛苦するとも、銃後青年の赤誠の一端を披瀝し、聖戰何年續かんとも銃後の完璧を期し、以て勇士をして後顧の憂ひなからしめざるやう努力せんとの決意を以て、昭和十三年三月銃後後援會と連絡して青年團勞力奉仕班を組織するに至つた。

先づ實行に先立つて團自體の強化を圖るため役員の改選をなし、從來の微温的經營を一掃して團の統一強化により、郷土中心の單なる修養から更に進んで、日本青年たるの自覺に立つて、皇國精神を鍊磨し、皇運扶翼の臣民道に徹せしめんと團の革新を行ひ、奉仕班の活潑なる活動の基礎を固めたのであつた。

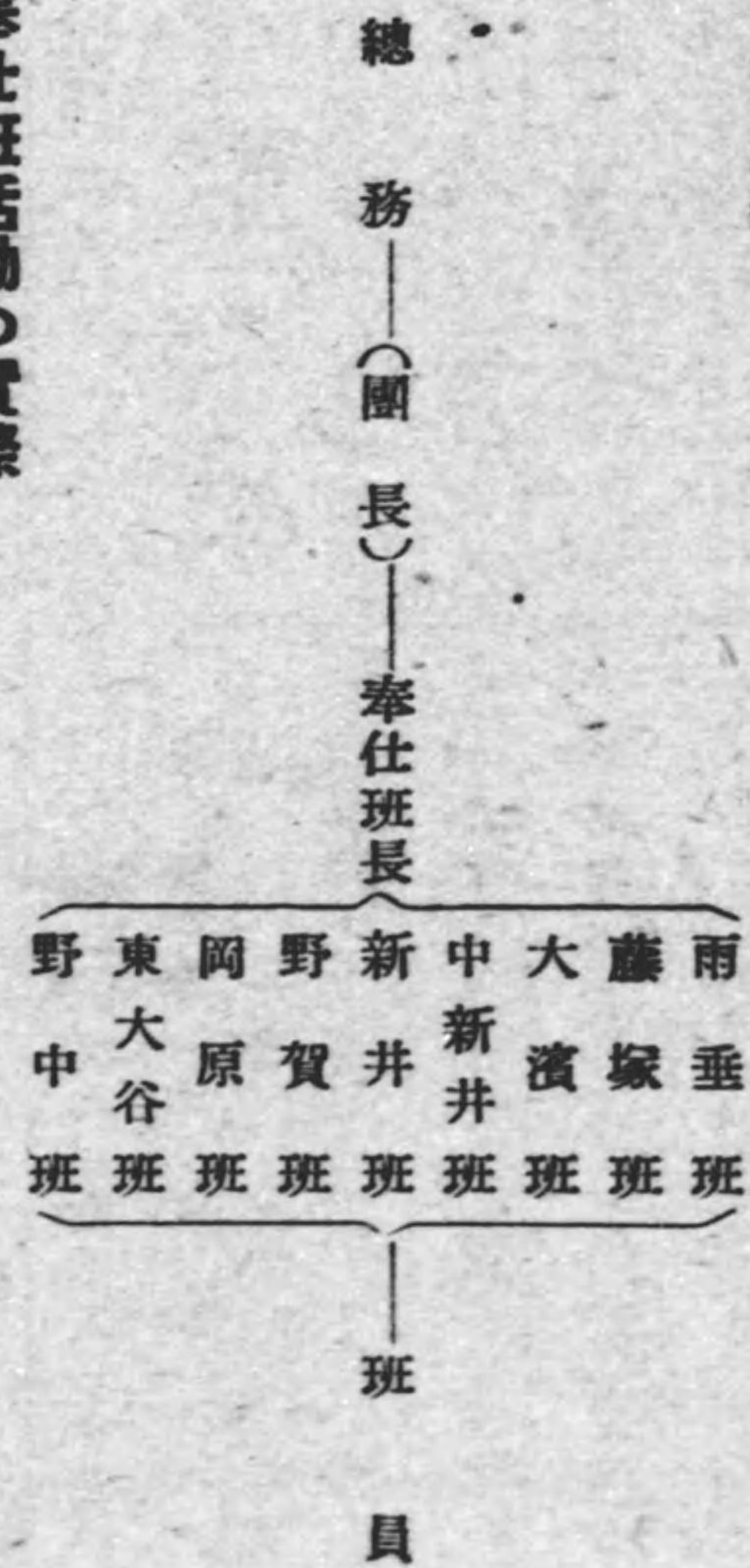
二、勞力奉仕班の組織

相次で起る應召遺家族の勞力不足を助けるため、又一方一般公共事業に奉仕せしむるため、全團員を以て勞力奉仕班が組織せられた。この奉仕班は各支部を單位として各支部毎に班を設け、班長には各支部長を之に充て、團長が全部を統轄することとなつてゐる。尙次の様な奉仕班要項を定め之に遵つて活動してゐるが實施に當つては班長は勞力奉仕簿を持參し、奉仕の概要を記入することになつてゐる。

大淵村青年團勞力奉仕班要項

- 一、本奉仕班へ大淵村青年團勞力奉仕班ト稱ス
- 一、大淵村青年團内ニ九奉仕班ヲ設置シ〇〇奉仕班（各支部名ヲ冠ス）ト呼ブ
- 一、班長へ該當支部長ヲ以テ之ニ充テ班員ハ該當支部員ヲ以テ構成ス
- 一、班長ハ該當班内ニ應召者アリタル場合ハ勞力調査票ニ基キ不足勞力ノ狀況ヲ調査シテ團長ニ提出スルモノトス
- 一、團長ハ不足勞力ヲ基本トシテ奉仕班員ノ動員ヲ班長ニ通告ス

- 一、班長へ團長ノ命ヲ待タズ狀況ニ應ジ班員ヲ動員スルコトヲ得
 - 一、本奉仕班へ應召家庭並ニ公共事業へノ奉仕ヲナスヲ以テ目的トス
- 勞力奉仕班組織



三、勞力奉仕班活動の實際

奉仕班の實行單位は支部を單位とした班にあるため、班長は當該班内より應召者を出した場合、直ちに勞力調査票に基き詳細なる調査をなし、之を團長に提出するのである。そして團長の命により其の家族の都合並に部落の銃後後援會と緊密なる連絡提携の下に、更に綿密なる奉仕計畫を樹立し、それに基づいて活動してゐる。勞力調査様式は次の如くである。

六月	四六	一三(田整地)	四		
七月	三				
十一月	一〇	六(稻刈り)	三(芋堀り)	五(俵シバリ)	
十二月	五		六(麥蒔キ)		

團長は田打ち、田植又は茶刈りや俵しぼり等の定期の奉仕すべきものに對し、各班長に書類を以て通告し、班長は勞力調査票に基いて、どこの農家では何作業に何人奉仕すべきかと計畫を樹て、班毎に集合して奉仕してゐるが、其れ以外の奉仕は班長の意圖に依つてそれ／＼實施されてゐる。

本村ではイバリと言つて水田の作土を二尺五寸位に積上げる作業が行はれ、この作業は農家の仕事中最も困難とされてゐる仕事であるが、血氣盛の青年達が向ふ鉢巻に赤銅色の脊を露し、競争的に奉仕して居る事が相互の技量の向上を圖る結果ともなり、良い効果をもたらしてゐる。又俵しぼり等の奉仕も非常に力量を要し困難な仕事であるが、元氣なる青年に依つて愉快に實施されてゐる。

尙本團の昨年度に於ける奉仕実績は次の如くである。
大洞村青年團勞力奉仕班奉仕状況

班別	班員數	奉仕日數	一人平均日數	備考
中新井	九人	五〇日	五・五	
雨垂	一三	六四	五・〇	
東大谷	六	二〇	三・三	
大濱	五	三〇	六・〇	
岡原	一〇	四六	四・六	
野賀	二	二五	二・三	
野中	九	二五	二・八	
新井	二〇	二八	二・八	
藤塚	三	四九	四・〇	
合計	八六	三三七	三・九	

「備考」正團員七十六名、準團員十名

四、一般的奉仕状況

勤勞愛好の精神を昂揚し、その實踐によつて生産を確保し、生産力の強化進展を圖るため全村の水稲種籾水選を實施してゐる。その方法は全村を四區分して四ヶ所に於て四日間に亘り實行するのであるが、これは悪質の籾と稻の病菌の殺滅を目的とするため、其の際使用する苦代は本團に於て優良なるものを調達するを以て村民舉つて參集し、昨年度は二十八石の籾水選を行つてゐる。

次に苗代田の害虫一齊豫防驅除をなしてゐるが、六月中の最も多忙な時期にて一般村民に於て容易に實施出來難いので、青年達が率先して實施してゐる。その方法は全農家の苗代田に硫酸ニコチン八百倍のものと石鹼（水一斗に對し六匁）の溶液を坪五合の割合を以て、全團員が噴霧器を肩にして散布する。かく國民主要食糧たる米の増産に積極的に努力し、村民よりも信望の的となつてゐる、其他マラリヤ豫防のため全村汚水路に重油を散布する等各方面に亘つて活動してゐる。その奉仕活動実績表は次の如くである

班別	班員數	奉仕日數		備考
		鹽水選	驅除害虫	
中新井	九人	二日	九日	六月ヨリ九月マデ
雨垂	一三	三	一三	
東大谷	六	四	六	
大濱	五	三	五	
岡原	一〇	三	一〇	
野賀	一三	二	一三	
野中	九	三	九	
新井	一〇	二	一〇	
藤塚	一三	四	一三	
計	八六	二六	八六	

造林事業に活躍する興國勤勞隊

兵庫縣多紀郡草山村青年團

從來非常なる難事とされて居た村内公有林地の造林作業を、純情なる青年の力によつて立派に開拓造林を完了し、更に次ぎ／＼の計畫に基づいて實施してゐる本團興國勤勞隊の活動狀況を以下順を追ふて記することとする。

興國勤勞隊の結成

兵庫縣に於ては、昭和十三年六月兵庫縣興國勤勞隊を編成し、全縣下十萬の青年を動員して、一人一ケ年一百時間、一ケ年の總見込時間一千萬時間の集團勤勞運動が企圖された。

その目的とする所は興國勤勞隊の集團勤行により、愛國心の鼓吹、勤勞精神の強化、體位の上、團體訓練の強化、資源の涵養であつて、特に之が實踐によつて盡忠報國の根本義に徹せしめ

んとするものである。

隊員は各町村青年團の團員を以て隊員とし、その編成は町村青年團では、其の地區の在住團員の全部を以て青年團興國勤勞隊を編成し、村青年團に於て編成するものを單位隊とし、順次郡市部隊縣集團を編成、従つて系統的に

縣集團—郡市部隊—町村部隊—分隊

と云ふやうに編成されることとなつた。

そして昭和十三年六月十五日神戸湊川神社に於て縣主催の興國勤勞運動祈誓式が行はれ、興國鎌、興國鉢、色紙を郡團長が拜受し、續いて七月四日神戸地方の大豪雨の日、篠山舊城内に於て郡の祈誓式並に右三品の傳達式が行はれた。本村より團長參列拜受して歸村し、直ちに村長、學校長其他村有力者と團幹部が種々熟議檢討をなし、公有林野の造林事業を行ふこととなり、縣の指導方針に基づいて物心一如の大理想を具現せんと、計畫の大綱を樹立し隊員編成に着手したのであつた。

土地の狀況と進展過程

造林事業地の面積は三町歩であるが、その内郡有林と村有林の二町歩は未整理である。土地肥沃にして造林に適當なる地であるが、蔓密生して小人數にては伐採するも倒すこと不可能であり然も伐木處理の方法として炭を焼く事も出来ない木の種類のため、焼き捨てるより途なく、加ふるに山深く隊員の遠きは二里以上も有り、地拵をなすに非常に難事な處である。兼ねて村事業として三ヶ年計畫を以て、之が實現を期しながら實行不可能にて行き悩んで居た状態であり、此の場所こそ青年の純情を以て、熱と力で立派に開拓造林すべきだと決意したのであつた。

従來本村民は比較的青年に對する理解深く、各種會合事業等の出席率も相當良好ではあつたが今度の一百時間奉仕は負擔も重きため、事業の圓滑を計り、青年としても心地よく参加出来るやう村長、學校長、團長の連名を以て先づ實施に先立ち、父兄に對し次のやうな書信を發したのであつた。

父兄への書信

拜啓時下三伏の候と申し乍ら涼しい土用のやうに思ひますが、皆々様御機嫌よく御奮闘遊ばされてゐます事と存じます。

御尊家御子息様青年團員として、互に鍊磨をなし修養遊ばされ善良なる公民として將來を期すべく共に念願してゐます。

扱て御承知の通り時局は益々重大性を加へ我が國史上未曾有の大戦争とも言ひ得ることでせうが、私達は戰場が國外に有るので、お互に身を以て戦争を痛感する度が或は薄い嫌もあります。蔣介石の長期抗日と世界の情勢は少しも樂觀を許しません。されば國家の非常重大時局に直面して國民精神總動員の下に、夫々その分野によりて盡忠報國、舉國一致、堅忍持久を以て、この長期戦にどうしても我が國の目的たる東洋平和の確立するまでは、國民の一人一人が巖に嚙りついても頑張らねばなりません、そして國策に順應して統制ある國民の行動をとり、その根本たる國民精神の緊張を圖らねばなりません。

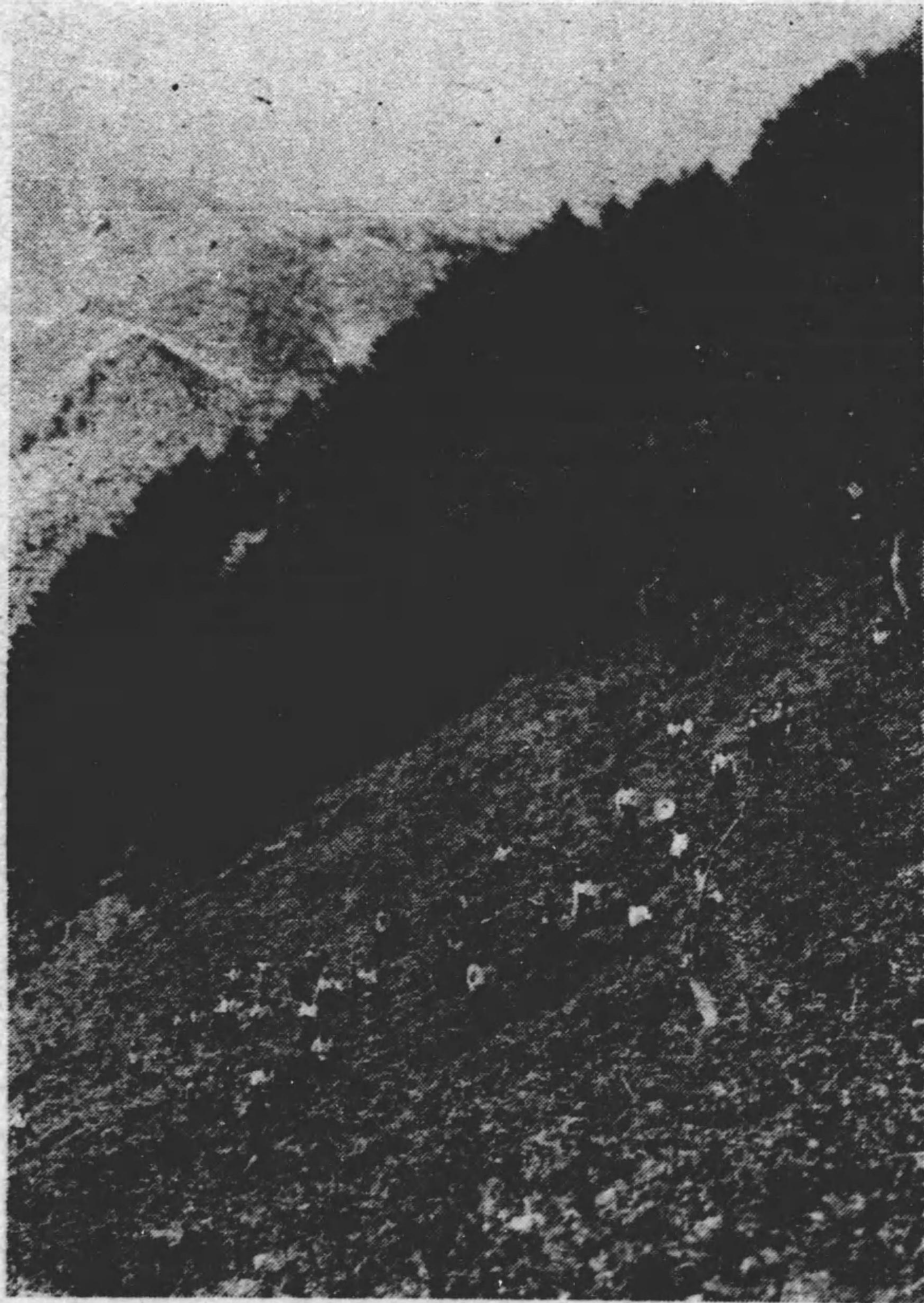
就中國家觀念に基く勤勞愛好の精神を強調し、之を實踐して生産を確保し、生産力の擴充促進を企劃することは、國家存立に缺くべからざる經濟部面を尊重し、物心一如の社會風潮を振起すること帝國永遠の基礎を固くするものであります。

此の時に於て全國に澎湃として起つた勤勞奉仕運動により、兵庫縣に於ても之が統制ある計畫

と組織を以て興國勤勞隊が編成されることになりました。

その組織は縣集團—郡部隊—村隊—分隊—(支部)と云ふ風に、各支部より村、村から郡、郡より縣と云ふ風に系統的に組織されてゐます。そして實施事業は種々ありますが、組織員(團員)一人一ヶ年百時間づゝ勤行するものであります。青年を御持ちになつてゐる御父兄に於ては青年學校にも出席せなければならぬ、青年團の行事にも出席せなければならぬこれだけでも平時よりも遙かに回數が増してゐるのに、その上百時間もと思召すに相違ありませんが、前記の通りで平時ではなく戦時であり、又銃後青年の義務でもありますことに御諒解下さいまして、御忙しい所を誠に恐れ入りますが、當事者としてもなるべく皆様の御心中を拜察しまして、御したい考へをもつてゐますので、どうか心地よく青年に出役するやう御後援を願ひ度いのであります。

本村隊の事業計畫は公有林の杉の植林二町七反歩餘りをなすやうに、村當局と御相談を願つてゐます。事業としても相當に將來性のあること、確信してゐます。そして時期は、盆直後十八日を以て徴入れをなし、能率を擧げて早く終りたいと思つてゐる次第ですから何卒御諒察下さいま



地拵作業

すやう御願ひ申上げる次第であります。

尙御手数恐れ入りますが團員宣誓書に御承諾の捺印を頂き度く御依頼申し上げます。

先は右御諒解を得たく申上げました次第何卒宜敷御依頼申し上げます。

敬具

昭和十三年七月三十日

草山村長 橋本作太郎
東郷小學校長 宇杉昌雄
草山村青年團長 高辻實造

殿

以上の父兄への書信と共に、次のやうな宣誓書を作り各團員より提出せしめることとした。

宣誓書

草山村青年團興國勤勞隊第 分隊

氏 名

私儀興國勤勞隊ノ趣旨ヲ體シ組織員トシテ勤勞作業ヲ通シ國土ヲ愛護シ資源ノ涵養増産ヲ圖リ

以テ郷土ノ振興國運ノ進展ニ寄與センコトヲ宣誓シマス

昭和十三年八月一日

父 氏

兄 名
① ②

草山村青年團興國勤勞隊長殿

事業計畫の概要

興國勤勞運動事業計畫書

一、勤勞隊の名稱 草山村青年團興國勤勞隊

二、組織及び編成

1、組織 草山村に在住せる青年團員全員を以て組織す

2、編成 草山村内四部落を左の分隊に分つ

第一分隊 草山村川阪支部員

第二分隊 草山村東郷支部員

第三分隊 草山村遠方支部員
第四分隊 草山村桑原支部員

三、作業の種類別 公有林野造林事業

四、作業地の面積 三町歩

五、同土地の種類別 山林荒蕪地

六、所要勞力 六八〇〇時間

七、勤勞能力調査

- 1、勤勞 隊員 總數 五〇人
- 2、毎回勤勞可能員數 四〇人
- 3、一ヶ年間勤勞豫定回数 一〇回
- 4、一回の勤勞時數(一人當) 一〇時間
- 5、一ヶ年一人の勤勞豫定時數 一〇〇時間
- 6、一ヶ年の勤勞豫定延時數 四〇〇〇時間

八、從事期間

- 一、着手 昭和十三年八月十八日
 - 一、完成 昭和十五年八月十七日
- 尙右の内譯は次の通りである

1、地拵作業

- 一、着手 昭和十三年八月十八日
- 一、完成 昭和十三年八月二十四日

2、造林運搬作業

- 一、着手 昭和十三年九月四日
- 一、完成 昭和十三年九月六日

3、植付作業

- 一、着手 昭和十四年三月十五日
- 一、完成 昭和十四年三月十六日

4、下刈作業

一、着手

昭和十四年七月十五日

一、完成

昭和十四年七月十七日
昭和十五年七月十七日

5、補植作業

一、着手

昭和十五年三月十五日

一、完成 同

九、完成後の利用豫定

第一期完了後繼續して手入作業をなし完成後は村有林となす

一〇、作業期間中に於ける修養方法

- 1、作業開始に當り興國欽興國鎌を迎へ遙拜、朗唱及び皇軍勇士への黙禱等をなす
- 2、精神教育に關する簡單なる講話及び感想發表
- 3、雜誌青年により晝食休憩時約三十分間輪讀會をなす
- 4、建國體操又はラヂオ體操を毎作業後實施す

5、萬歳三唱

6、興國欽興國鎌を送る

7、現地に於て一泊修養會を開催する

8、植林智識の研究をなす

一一、年次計畫

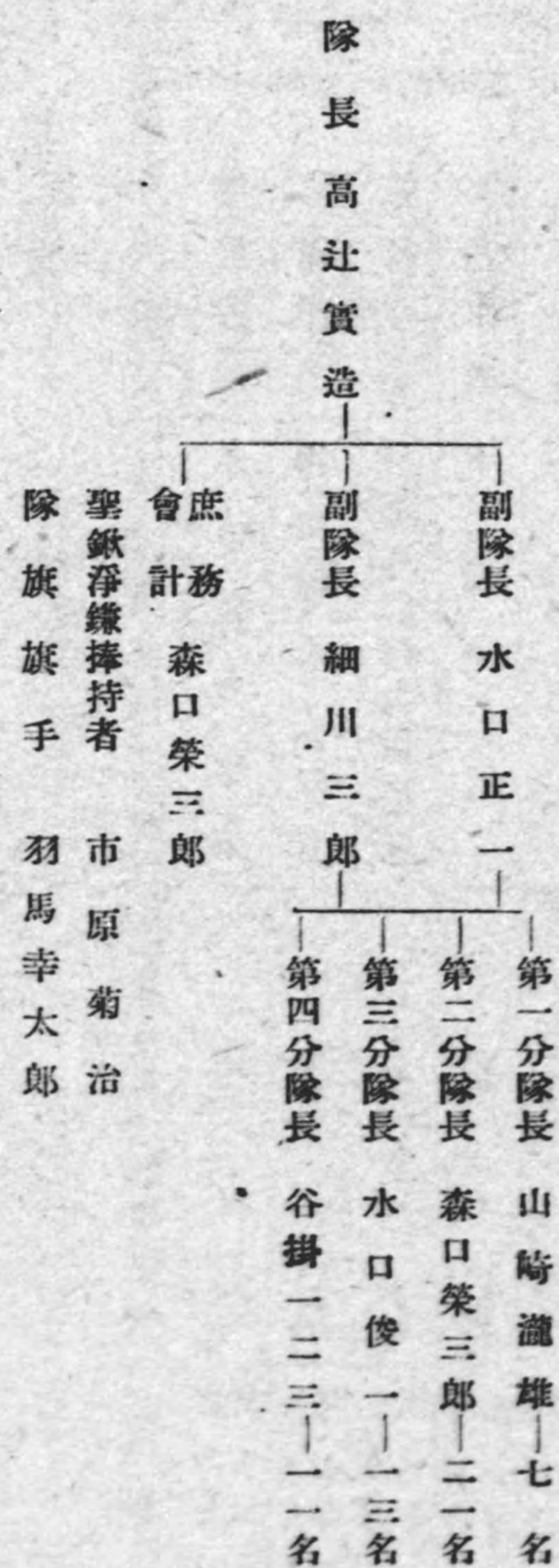
年次	作業項目		作業内容	所要人員	所要時間	實施年月日
	地拵作業	運搬作業				
三十三年度	地拵作業	運搬作業	雜木伐採整理 伐採雜木ノ持出	二六人	二六〇時	自八月二十四日 至八月二十八日
三十四年度	下刈作業	植付作業	杉苗九〇〇〇本植付	七	七〇	自三月十六日 至三月二十五日
三十五年度	下刈作業	補植作業	補植及ビ手入	二〇	二〇〇	自七月十五日 至七月二十五日

組織及び編成

一、組織

草山村に在住せる青年團員を以て組織す

二、編成



結成並に祈誓式

以上のやうな計畫が出来父兄の諒解も得て團員一同大なる決心の下に團結し、愈々八月一日氏神社頭に村長、學校長を始め各種團體其他村民多數參列し、いとも嚴肅裡に祈誓式を舉行し、隊旗には菊水の紋を配し楠公精神を表徴し、草山村青年團興國勤勞隊とあるも一入隊の緊張味が加

へられた。

神官の祝詞、玉串奉奠等あり、隊員宣誓書を隊長に手交し、隊長氏神の神前にて隊員と共に宣言決議をなし、一同萬難を排し一線將士の心を心として事業の必行を誓ひ、村長校長の激勵の辭があつて後萬歳を三唱し意義ある式は終了した。それより直ちに菊水の隊旗を先頭に隊長以下隊員一同聖鉞淨鎌を捧持して、氏神社頭より一里半の現場へ愛國行進曲も聲高らかに大行進をなし現場に到着鎌入れ式が舉行された。その順序は次の通りである。

- 一、開式ノ辭
- 一、君力代齊唱
- 一、鎮魂遙拜
- 一、聖鉞淨鎌奉迎
- 一、修祓祝詞
- 一、宣言
- 一、隊長訓辭

- 一、村長所感
- 一、錄入レ
- 一、愛國行進曲合唱
- 一、萬歳三唱
- 一、閉式ノ辭

宣言、決議文は次の通りである。

宣 言

吾等ハ祖國非常重大時局ヲ確認シ國民精神總動員ノ下興國勤勞隊ノ組織員タルヲ自覺シ祖國愛ノ赤誠ニ燃エ勤勞精神ヲ純化シ以テ青年團報國ノ實ヲ擧ゲ勤勞集團動行ノ訓練ニヨリ協同偕和ノ精神ヲ涵養シ滅私奉公ノ實ヲアゲ以テ國策ニ順應シ身ヲ以テ國運進展ニ寄與シ堅忍持久銃後國民トシテノ本分ヲ守リ郷土ノ開發新興ニ寄與センコトヲ期ス

右宣言ス

昭和十三年八月一日

草山村青年團興國勤勞隊

決 議

草山村青年團興國勤勞隊員ハ現下ノ時局ニ鑑ミ左記事項ヲ實踐シ以テ銃後青年タルノ本分ヲ竭サンコトヲ期ス

記

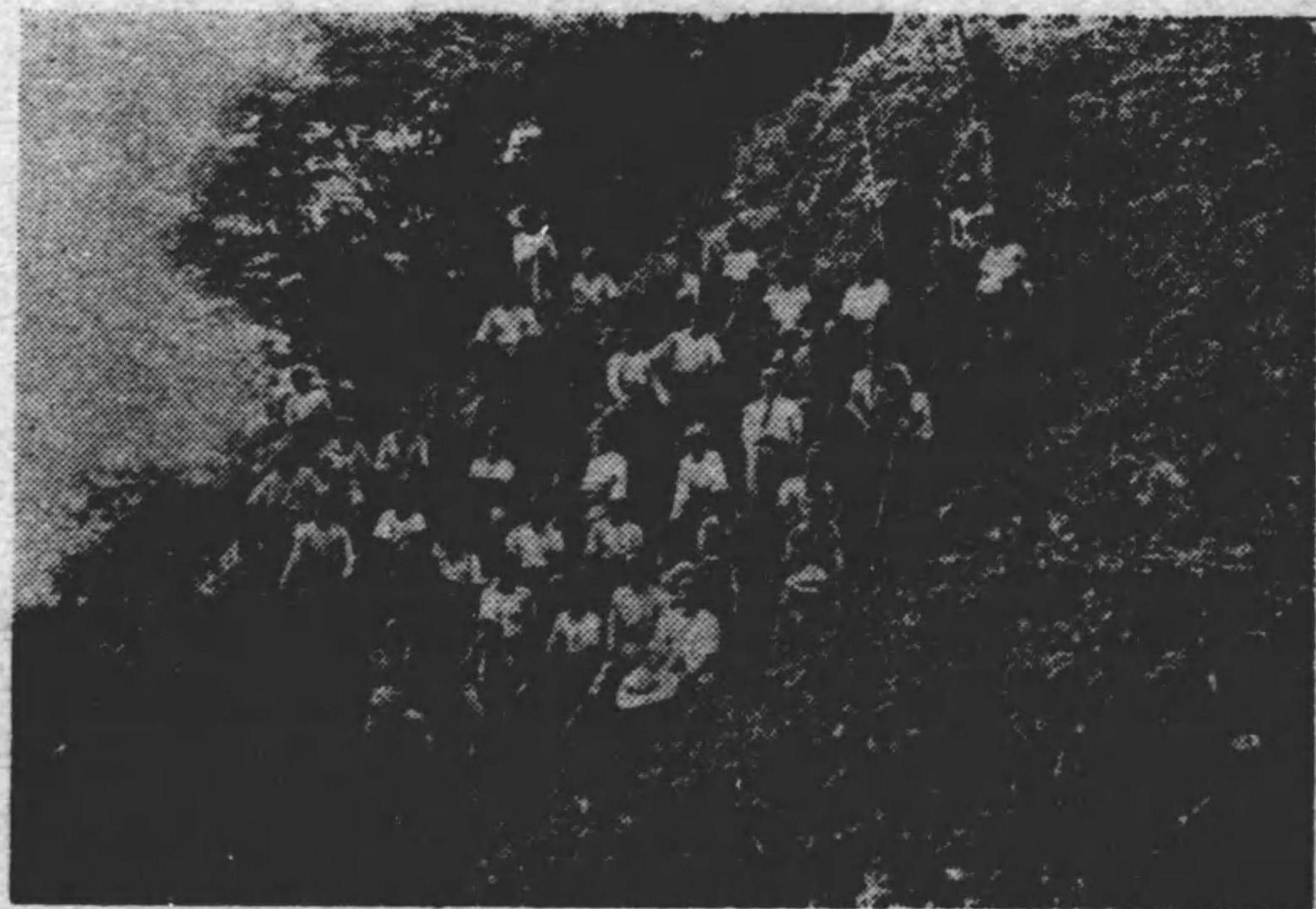
- 一、吾等ハ誓ツテ勤勞ヲ實踐愛好シ國家總力戰ノ勇敢ナル戰士トナラン
 - 一、吾等ハ時局ノ正シキ認識ヲ深メ盡忠報國ノ赤誠ニ燃エ義勇奉公ノ精神ニ生キン
 - 一、吾等ハ純真ナル意氣ト熱ヲ以テ難艱ヲ克服シ利害ヲ超越シテ目的貫徹ニ邁進セン
- 右決議ス

昭和十三年八月一日

作業實施狀況

一、伐木作業

愈々總ての準備は完了し隊員の意氣も高揚した八月十八日の黎明、葉先に光る露を踏みしめながら、皇軍の進軍を偲びつゝ意氣に燃える青年一同は現地へ強行軍をした。途中靈峰三嶽の山麓



作業を終つて

小川せらぐ邊、愛國行進曲「見よ東海の空明けて」の音吐朗々萬山にこだまし隊員の意氣益々盛んであつた。見渡す限り荆と藤蔓の蒼々たる深山にして、多年村民が躊躇し手出し得なかつたこの場所を、我等青年の手によつて之を征服せんものと、互に相勵まし合つて作業が行はれ、麗しい相互扶助の情景が點出され、自然の堅城も一角より切り拓かれて行く、その集團勤行の偉大なる力、團體の持つ不思議な力、之こそ祖國日本の現在最も必要とする力であると考へ一致團結奮闘が續けられた。斯くて一日九時間乃至十時間の勤務を終り黙禱を捧げ明日を約して家路に向ふ事既に五度、困難なりし伐木作業も隊員の努

力に依つて完全に終了した。今その作業實施成績を示せば次の通りである。
伐採作業出勤表

日	時	分隊長		第一分隊	第二分隊	第三分隊	第四分隊	一人ノ	作業	出席	出席隊員	出席隊員作業時間	備考
		出	分隊員數										
八月十八日	午前七時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一一人	九時	四八時	四三時	初日ニ付準備ニテ一時同少シ		
八月十九日	午前七時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一一人	九時	四八時	四三時			
八月二十日	午前七時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一一人	九時	四八時	四三時			
八月二十一日	午前七時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一一人	九時	四八時	四三時			
八月二十二日	午前七時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一一人	九時	四八時	四三時			
八月二十三日	午前七時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一一人	九時	四八時	四三時			
八月二十四日	午前七時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一一人	九時	四八時	四三時			
計		出	七人	出	二一人	出	一一人	九時	四八時	四三時			

二、伐木燒却作業

伐木は製炭材に適せず又薪木とするも運搬に多くの勞力を要する爲、一部分の良材を製炭せるのみにて大部分は燒却し地拵をしたのであつた。

三、植付作業

地拵の完了と共に杉苗九千本を村農會の斡旋により購入し（此の経費は村費負擔とす）植林の経験深き指導者の指導により第一期作業を終了したのであつた。

伐木焼却並ニ杉苗植付作業出勤表

日	時	分隊長		第一分隊	第二分隊	第三分隊	第四分隊	一人ノ	出席隊	出席隊	備考
		分隊長	分隊長								
三月二十日	午前八時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一三人	九時	二一人	三六九	伐木ノ焼却作業
三月廿一日	午前八時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一三人	九時	二一人	三六九	伐木ノ焼却作業
三月廿二日	午前八時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一三人	九時	二一人	三六九	伐木ノ焼却作業
三月廿三日	午前八時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一三人	九時	二一人	三六九	伐木ノ焼却作業
三月廿四日	午前八時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一三人	九時	二一人	三六九	伐木ノ焼却作業
三月廿五日	午前八時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一三人	九時	二一人	三六九	杉苗運搬
三月廿六日	午前八時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一三人	九時	二一人	三六九	杉苗運搬
三月廿七日	午前八時—後五時	出	七人	出	二一人	出	一三人	九時	二一人	三六九	杉苗運搬
計		出	七人	出	二一人	出	一三人	三三	一〇五	一七五七	終植付作業了

以上の如く昭和十三年度並に十四年度初に於ける豫定計畫である第一期作業は好成績の裡に終了し其の後の計畫遂行に邁進中である。

傳統的勤勞精神を發揮

岩手縣下閉伊郡船越村青年團

船越村は地形上船越區、田ノ濱區、大浦區の三部落に分れて居り、その關係上青年團も各部落毎に別個な發達をなし來つた。

各區には舊幕時代から若衆組と言つて各戸から青年一名づゝ組員となり、青年のない家庭では老人が之に代つて組員となつてゐた。そして若衆組は區内各戸の吉凶に奉仕し或は害虫驅除、道路普請、水難救助等の社會奉仕をなす外神社奉仕とか、夜警、火難、盜難の防止等自發的に盛に活動してゐた。

明治四十三年二月船越區の青年は從來の若衆組を解組して青年會を組織した。續いて他の二區の青年も同様青年會の創立を見るに至つた。そして各區青年會は五綱領を定め修養機關として夜

學會を開始し又は風紀の矯正、勤儉貯蓄の勵行及び會員團結のため、植林事業を行ふ等村内有力者の應援と當時の青年幹部の熱烈なる努力とによつて着々實績を擧げつゝあつた。

大正三年二月に至り各區青年會役員は、三區の青年會を一丸として村青年會を結成せんとし、寄り／＼意見を交換し、協議を遂げ其の機を熟するを待つたのであつた。そして大正四年三月村青年會の第一回總會を催し、茲に始めて船越村青年會が結成せられた。大正七年五月内務、文部兩省の訓令を以て青年の嚮ふ處を指示されてから、専ら修養機關として活動するに至り、更に昭和七年八月會則を改正し、郷土の經濟更生及び教化運動によつて精神文化の開發に努めたのであつた。更に昭和十年九月船越村青年團と改稱して今日に至つて居る。

そして部落毎に區團を置き現在四〇〇名の團員を有し、活潑なる活動をしてゐるが、かくの如く傳統的に奉仕的活動に中心を置いて發達して來た本團は、事變發生と共にそうした素地の上に一層目覺しき活動が展開された。

一、勤勞奉仕活動の進展過程

以上の如く本團の勤勞奉仕活動は相當以前から行はれて居たのであるが、特に集團的勤勞とし

て統制ある活動をなすに至つたのは昭和八年三月三陸沿岸地方を襲つた大津浪に見舞はられた時からであつて、この時にはこの船越村も殆ど全滅に近き惨害を被つたのであつた。その時本團では直前の地震により津浪來るの豫感をいだし直ちに警戒したため、隣村に比較して被害は減少されたのであつたが、それでも家屋、加工場、漁船、道路の破損、耕地の埋没等手の施す術もなき状態に村民は絶望の底につき落された。本團はこの時こそ日頃の修養の結果を發揮すべきであると考え、驟起し、一米亂れざる團結の下に同年十二月まで日夜不眠不休の勤勞奉仕が續けられ、他村より全然援助を受くることもなく、涙ぐましい努力によつて、復興の曙光を見るに至つたのであつた。この偶然の體驗が非常に良結果を及ぼし、團員各自の反省自覺が促進せられ更に一層の修練が積まれた。

昭和九年本村では常會に於て船越村々民訓十則を定め之を勵行することとなつた。本團ではその村民訓の内「合同體の活動」に重點を置き本團の事業を修養施設、社會施設、産業施設、體育施設の四項に分類し、指導員を置いて具體的細目を定め實行せられた。尙その村民訓は次の通りである。

- 一、禮儀ヲ正シクシマセウ
- 二、時間ヲ正確ニ守リマセウ
- 三、教學ヲ振興シテ智徳ノ向上ヲ圖リマセウ
- 四、神佛ヲ信仰シマセウ
- 五、勤勞ヲ樂シミマセウ
- 六、儉約シテ生活ノ安定ヲ圖リマセウ
- 七、家内和合シテ働キマセウ
- 八、村中相互ニ助け合ツテ暮シマセウ
- 九、合同體ノ活動ヲ振興シマセウ
- 一〇、和協ニヨツテ住ミ良イ村ヲ建設シマセウ

而して昭和十二年七月支那事變勃發するや本團では直ちに時局對策實行項目を定め、銃後の守りを固くした。更に時局の進展に伴つて地方青年道場を開設して本團の銃後對策を検討し之が強化を圖ると共に團員の決意を一層鞏固にし、百數十名の應召家庭の勤勞奉仕等は團員の勤勞倍加によつて些の遺憾なきを期した。進んで昭和十三年五月岩手縣に於ては秩父宮殿下台應奉戴青年勤勞報國運動として全縣下の青年に之が奮起を促した。本團では直ちに縣の指示によつて男女青

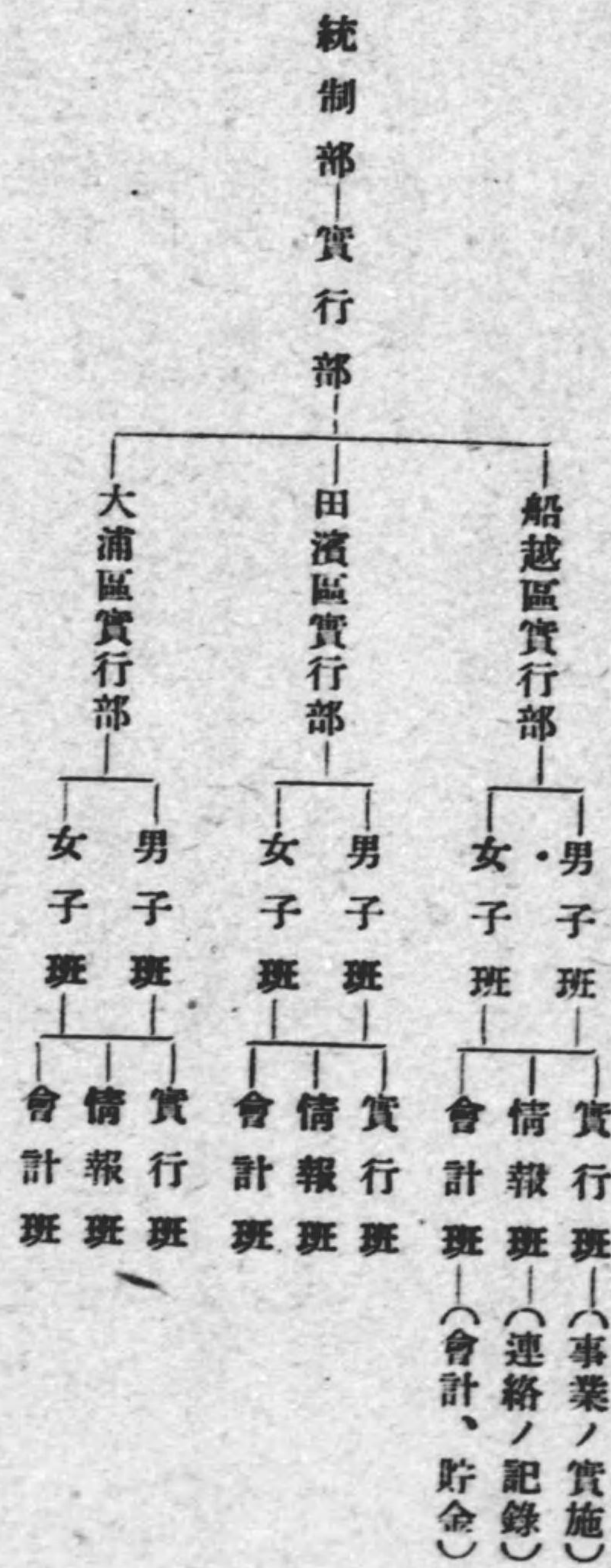
年團青年學校が一丸となつて船越村青年勤勞報國隊を結成し、感激と緊張によつて一層活潑な活動が實施せらるに至つた。

二、船越村青年勤勞報國隊活動狀況

一、目的

秩父宮殿下台慮奉戴青年勤勞報國運動の趣旨に基き、本村男女青年團は欣然起つて之に参加し、惟神の清明き心を以て勤勞に奉仕し、國策に隨ひ奮つて曠古の大業を翼賛し、總べて戰場にある心構を以て捨身の追進をなし、去私奉公殉國の至情を發露して一意台慮に奉答せんとす。

二、組織



三、會議

總會 毎年二月、八月二回開催す

例会 毎月一回開催して前月の事業實施反省をなすと共に當月實施すべき事業及び臨時

又は追加事業の打合せ分擔等を協議す

四、實施事項

1、青年集團勤勞奉仕

イ、應召遺家族への奉仕

ロ、軍役奉仕

ハ、各種公共事業への奉仕

2、青年産業強化活動

イ、單位團體の強化

ロ、生産擴充五ヶ年計畫

3、青年報國貯金

大要は以上の通りであるが本團に於ける勤勞奉仕は次の如き集團勤勞奉仕實施計畫を作り、一ヶ年を通じてその月その月に應じた計畫に基き實施し實績を擧げてゐる。

集團勤勞奉仕實施計畫書

下閉伊郡船越村勤勞報國圖

月	項事							
	種	類	場	所	分	量	日(回)數	
五	社寺清掃	村內清掃	社寺清掃	村內	八ヶ所	一八〇	一回	
四	薪運	船越—四十八坂	薪運	船越—四十八坂	十八棚	八六	二日	
四	道路修繕	船越—大浦間	道路修繕	船越—大浦間	一里半	六〇	一日	
四	畑作付	村內	畑作付	村內	三ヶ區	一八〇	二日	
四	造林植付	村有山林	造林植付	村有山林	二ヶ所	一二〇	三日	
五	社寺清掃	村內	社寺清掃	村內	八ヶ所	一八〇	一回	
五	村內清掃	道路海濱魚揚場	村內清掃	道路海濱魚揚場	六里	一八〇	一回	
							總員數	一八〇
							男女別	男 一六二 女 一八〇
							備考	遺家族 魚揚場ヲモ

月	項事							
	種	類	場	所	分	量	日(回)數	
六	社寺清掃	村內	社寺清掃	村內	八ヶ所	一八〇	一回	
六	道路修繕	船越—海濱魚揚場	道路修繕	船越—海濱魚揚場	一里十町	一二〇	二日	
六	田植	村內	田植	村內	三ヶ區	一八〇	五日	
六	託兒所	村內	託兒所	村內	二ヶ所	一六〇	三日	
六	磯掃除	村內	磯掃除	村內	三ヶ所	一八〇	三日	
六	保安林	村內	保安林	村內	三ヶ所	一八〇	一回	
六	防風林	村內	防風林	村內	三ヶ所	一八〇	一回	
六	毛髮蒐集	村內	毛髮蒐集	村內	各戸ヨリ	一八〇	一回	
							總員數	一八〇
							男女別	男 一六二 女 一八〇
							備考	遺家族 魚揚場ヲモ

月 一 十	月 十	月 九	
報告祈願祭 稻刈 村内清掃 社寺清掃	毛髮蒐集 託兒所 村内清掃 社寺清掃	毛髮蒐集 村内清掃 社寺清掃	毛髮蒐集
荒神社 村内	道路海濱魚揚場 村内	道路海濱魚揚場 村内	村内
三區	各戸ヨリ 二ヶ所	各戸ヨリ 六ヶ所	各戸ヨリ
一回	一回	一回	一回
二五〇	一八〇	一八〇	六〇
女男 一四〇〇	女女 六〇	女男 六二〇〇	女 六〇
應召者家庭	魚揚場ヲモ		

月 八	月 七
郷倉清掃 河川改修 畑作付 村内清掃 社寺清掃	毛髮蒐集 船付場整理 仕立裁縫 田作除草 投石 乾場整理 道路修繕 村内清掃
村内	道路海濱魚揚場 船越吉里間 道路海濱魚揚場
三ヶ所	各戸ヨリ 三ヶ所
一回	一回
一八〇	一八〇
女男 一六〇〇	女男 六二〇〇
應召者家庭	魚揚場ヲモ

五、實施狀況並に其の成績
 實施上に於ける規律訓練としての毎日の行事は次の如くである。

月 三					月 二														
毛髮蒐集	夜警	薪取	除雪	村内清掃	社寺清掃	毛髮蒐集	夜警	開網	除雪	村内清掃	社寺清掃								
村内	村内	村内	村内	道路海濱魚揚場	村内	村内	村内	村内	村内	道路海濱魚揚場	村内								
各戸ヨリ	三區	三區	三區	六里	八ヶ所	各戸ヨリ	三區	一町歩	三區	六里	八ヶ所								
一回	毎夜	二日	一回	三回	一回	一回	毎夜	七日	二回	三回	一回								
六〇	六〇	二〇	一五〇	一八〇	一八〇	六〇	六〇	一五〇	一五〇	一八〇	一八〇								
女	男	女	男	男	女	女	男	女	男	女	男								
六〇	六〇	六〇	五〇	一五〇	六二〇	六〇	六〇	五〇	一五〇	六二〇	六二〇								
毎夜六名交替					魚揚場ヲモ					六名毎夜交替					魚揚場ヲモ				

月 一				月 二 十											
毛髮蒐集	夜警	薪取	村内清掃	社寺清掃	毛髮蒐集	船揚場整理	仕立裁縫	夜警	郷倉清整	取入	村内清掃	社寺清掃	毛髮蒐集		
村内	村内	村内	村内	村内	村内	村内	村内	村内	村内	村内	道路海濱魚揚場	村内	村内		
各戸ヨリ	三區	三區	六里	八ヶ所	各戸ヨリ	八ヶ所	三區	三區	三區	三區	六里	八ヶ所	各戸ヨリ		
一回	毎夜	五日	三回	一回	一回	一回	一回	毎夜	一回	一回	三回	一回	一回		
六〇	六〇	二〇	一八〇	一八〇	六〇	一五〇	六〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	六〇		
女	男	女	男	女	女	男	男	女	男	女	男	女	女		
六〇	六〇	六〇	五〇	一五〇	六〇	六〇	一五〇	六二〇	一五〇	六二〇	六二〇	六二〇	六〇		
毎夜六名交替				遺家族		魚揚場ヲモ		應召者家庭						魚揚場ヲモ	

一、集合人員點呼 一、村民訓十則唱和 一、作業止メ 一、國旗奉降
 一、國旗奉迎 一、團長挨拶 一、用具清掃 一、團長挨拶
 一、君カ代奉唱 一、作業上ノ注意 一、整列 一、雄叫ビ
 一、宮城遙拜 一、作業開始 一、宮城遙拜 一、解散
 作業は主として早朝とか夜間或は漁村の休日及び漁閑期を利用して實施され、それと共に青年の眞剣なる努力に依つて家業に何等支障は來さない。尙各班別にその活動の重點を記すると、先づ情報班は常に注意して村當局並に部落内又は各種團體應召家族と緊密なる連絡を保ち、その状況を常に承知する。實行班は毎月の例會に於て事業の種類及び分量により人員の分擔を打合せて之を實行に移す。會計班は毎月三回貯金の集金をするこゝとなつてゐる。
 主なる事業の成績としては

- 一、作業場建設 五棟七十坪
- 二、造林事業 五町五反歩に杉七千本の造林を實施、尙今後毎年植付を繼續の豫定なり。
- 三、海苔養殖 八百坪

四、築磯投石 海藻及び鮑の繁殖のため毎年實施し繁殖地の荒廢を防ぐ。
 五、磯掃除 海藻繁殖のため毎年行ひ有用海藻類の生産額を向上す。
 尙其他團員の勤勞奉仕によつて實績を擧げしもの多々あり、これ等を一括してその勤勞奉仕状況を左に記すこととする。(昨年五月より十一月まで)

月	應召遺家族へノ奉仕		各種公共事業へノ奉仕		共同作業	
	日數	出動人員	日數	出動人員	日數	出動人員
五月	三日	一二七人	五日	九七人	四日	八九人
六月	二日	六二人	二日	二六二人	一日	二〇人
七月	六日	二〇五人	四日	八〇人	四日	一五三人
八月	三日	三八人	七日	一七二人	七日	一二五人
九月	二日	五五人	九日	四九一人	六日	五五五人
十月	三日	三一人	一日	二五三人	〇日	五一人
十一月	三日	一八三人	四日	二六六人	五日	七四人
計	八七日	一〇八九人	六六日	一六二一人	三七日	五六八人

勤勞倍加と勤勞奉仕

埼玉縣北葛飾郡田宮村青年團

村と青年團のあらまし 田宮村は稲作本位の純農村で、年々二萬俵の米を移出する所謂米所である。戸数は三三〇戸で其他に大麥、小麥、養蠶を副業とし、非常に純朴な村として地方に評判が高く。

青年團は今から二十六年前に創立せられ、七支部に分れ百十名の團員を有して居る。團費は約三〇〇圓で、庶務、會計、産業、其他五部より成り、勤勞奉仕は産業部の事業として活動してゐる。

勤勞倍加運動 本團では從來から傳統的に入營兵士の留守宅や、疾病其の他の災危のため、農事が遅れた團員の家庭に對して、勞力奉仕をやつて來たが、支那事變が勃發すると同時に、日頃の修養の結果を示すのは此の時とばかりに、直ちに事變處理に乗り出した。そして第一に着手したのが勤勞倍加運動である。多くの人馬の應召を出し、且つ多量の消費物を必要とする事變化に於ては何よりも、先づ勤勞を倍加して生産を高めなければならぬと考へたからであつた。

此の運動は村農會と共同して、次のやうなチラシを複製して村民に配布し、彼等の自覺を促すと共に團員全部が「勤勞競走」といふことを行ふことによつて、その實績を擧げんとしてゐる。

◎ 勤勞倍加運動

時局に鑑み農村勞力の維持増加を計るため勤勞倍加を計りませう。

實行要目

- 一、早起ませう。
- 二、仕事量の増加を工夫させよう。
- 三、諸會合の集合は時間勵行——サット集合サット解散。
- 四、日々の業務に研究工風をさせよう。

五、協力しませう。
六、團結しませう。

◆農家記帳のお奨め

農家更生の基礎は記帳です、本年も續いて記帳しませう。
日記帳は直ぐ農會又は青年團に御申込下さい。

昭和十二年九月

田宮村青年團
田宮村農會

勤勞競走は全團員をして、本團作製の勤勞日誌に記帳せしめ、毎月の月例會で支部長が之を檢閲して、一ケ年間記入せしめる。而して年度末に團長、副團長、青年學校專任教員が審査員となつて、之を審査し勤勞日數の多い者から順次に三名一等、二等、三等として表彰するのである。但し勤勞日數が三百日以上に上つて居れば、それは何人あつても全部表彰する仕組となつてゐる。

勤勞日誌の作製は本團の最も苦心努力した點で、今日では三通り三様式の帳簿が出来てゐる。一般に記入し易く、計算が樂で、面白く記帳出来る様式が、評判も良く多く用いられてゐる。此の記帳する事が青年の記帳訓練ともなり、一石二鳥の効果を擧げてゐる。

勤勞倍加運動の實績は、事變前と三年後の今日とでは、約三割増加してゐる。斯くして増加された勞力は殆んど應召農家の勤勞奉仕に向けられて居る。斯く眞に地に着いた勤勞倍加運動を實行し、其の實績も顯著なるものがある。

應召農家の勤勞奉仕 事變の進展に伴つて村に銃後統制委員が出来、各區に出動將兵家族救護會が出来たので、本團でも之に呼應して種々銃後對策を樹てたのであるが、その中でも最も大きなものは勤勞奉仕である。この奉仕は本團に本部を置き、各支部を勞力奉仕班として、次のやうな活動要項を定めて活動してゐる。

田宮村青年團奉仕班活動要項

各支部を勞力奉仕班とし、其の字内に於て出征兵士を出せる農家に對し、順次勞力奉仕を行ふものとす。作業奉仕に際しては本團役員と協力合議の上、次の諸事項により實行するものとす。

一、各支部（班）は勞力奉仕簿を供へ置き、出缺席を記入し延人員を明にすると共に、作業の概況を記し置くべし。之は社會部長擔任すべし。

二、各支部（班）は各部落毎に聯絡係を置き、被奉仕農家の作業状況を常に監察せしむべし。

三、作業方法
 イ、集合時間は支部長豫告し置くべし。
 ロ、集合場所は必ず神社として、人員點呼をなし神社に參拜すべし。
 ハ、隊を整へ日章旗を先頭に所要の農具を携へて作業場に至り、日章旗を打ち立て奉仕にかゝるべし。

ニ、作業場は吾等青年の修養道場と心得て、奮闘努力精根を盡して奉仕すること。
 ホ、解散に先だち支部長は次の奉仕日時を明示すべし。
 ヘ、總て勞力奉仕は被奉仕農家に迷惑を及ぼさざるやう注意すべし。
 ト、時間勵行を旨とし、豫定の時間には必ず開始又は終了解散すべし。

勤勞奉仕活動の實績 前記要項の通り各聯絡係は部落内の被奉仕農家の作業進行程度を常に注

意し、若しその農家が奉仕を必要とする場合は直ちにその旨を班長に報告する、班長は日時を定めて所要の人員を動員して奉仕する。奉仕當日は神社に集合して人員點呼をなし、然る後に參拜しそれより作業場に行つて、國旗掲揚を行ひ嚴肅に作業に着手することになつてゐる。尙當日は班長は出席簿と、次のやうな様式の勞力奉仕簿を持參し、作業の概況を記録してゐる。

勞力奉仕簿記入様式

月	日	曜日	天候
被奉仕農家氏名			
〔記事〕	奉仕作業名	奉仕人員	延人員
		午前	午後
		時	時
		時間	時間
月	日	曜日	天候
被奉仕農家氏名			
〔記事〕	奉仕作業名	奉仕人員	延人員
		午前	午後
		時	時
		時間	時間

以上のやうにして實施してゐる本團の勤勞奉仕は、昭和十四年十二月末日までに、既に延人員六百名に達してゐる。

この勤勞倍加運動並に勤勞奉仕によつて、一般團員の奉仕精神が涵養せらるゝと共に、規律的團體訓練が著しく徹底し、非常なる効果を收めてゐる。のみならずその秩序あり統制ある奉仕の仕方並にそれによつて齎らされてゐる作業能率の向上（少くとも二割は一般より向上してゐる）には村民も非常に注目し且つ反省させられてゐる。特に勤勞倍加運動に伴ふ勞働日數の記帳は、團員の農家經營の上に及ぼす影響大なるものがある。

尙其の他にも國家資源愛護といふ見地から「青年製作品展覽會」を開催し、或は製繩競技大會等も開き、時局の重壓から兎角沈滞し勝な農村の生氣を盛んにして、若き血潮は愈々村内に漲きつてゐる。

森林治水に統制ある集團勤勞

山口縣玖珂郡廣瀨村青年團

廣瀨村は玖珂郡の西北部に位し、東西四里、南北五里、面積六方里餘と云ふ大村である。村内九千餘町歩に互る山林地中に、耕地はその一割に足らぬ僅かの八百餘町歩で、四面は山嶽重疊連互して全くの山村である。従つて林業は同村産業中重要な部位を占めてゐる。

本村には村有林として村内、府谷、稗原の兩字に約百町歩の土地を持つてゐるが、之が造林の手入は仲々容易な事ではない。平常時でも之を完全に經營せんとすれば尨大な經費と人手を要するのであるが、日支事變發生以來蔽ふべからざる勞力不足と、勞賃の暴騰等のため、之が撫育經營は頗る困難となつてゐた。

併し之をそのまま黙視して居ることは出来ない、また團としても實に座視するに忍びないこと

であつた。恰度縣より「森林治水事業に對する勤勞奉仕施設」に關する通牒を受けたので、直ちに「廣瀬村青年團勤勞奉仕防長愛國隊」を組織したのであつた。その目的とする處は、一は以て銃後に於ける統制ある集團的勤勞奉仕機關とし、一は銃後青年の特別な集團的修養訓練機關たらんとするにあつた。

記

森林治水事業に對する勤勞奉仕施設要項

廣瀬村青年團勤勞奉仕防長愛國隊

總旨 國運の發展は青年の意氣に須つこと多し。戰時體制下に於ける我が國の現狀は青年の活動を求むること彌々切なり。此の秋に方り剛健にして奉公の精神に燃ゆる青年の養成は國家喫緊の事項とす。而して眞の日本青年たる人格の陶冶、體位の向上を圖るには、靈氣を含む山野に於て、團體の本義に基き行の修練を爲さしむるを最適とす。

森林治水事業の目的は、國土の保全、美化、資源の培養にあり、之に奉仕せしむれば、雄大壯麗なる自然に接し、自ら奉公の念を實地に體驗するを以て青年の心身鍛錬に最適するものと

信ず。

以上の理由により、勤勞奉仕の運動を起し、本村青年をして森林治水事業に奉仕せしめ、日本精神を體現し、困苦缺乏に耐ゆる質實剛健の氣風を養成せんとす。

理想目標

- 1、國體觀念の徹底
- 2、勤勞報國信念の培養
- 3、實踐躬行主義の強調

(其の他略)

先づ初めに、村長、青年學校長並に職員、林業技手、農會技手、林野委員、正副團長等を以て「廣瀬村青年治水事業勤勞奉仕委員會」を組織して之が實施機關とした。即ち前記要項の趣旨に基づき、着々之を具體化し、青年團員百十名を二中隊に分ち、更に各中隊を數ヶ分隊に分つた。中隊長、分隊長は團員中より選任し、隊長には青年團長、副隊長には同村産業組合長が之に當り指揮をとることとなつた。

その第一回は昭和十三年八月十五日より同二十日迄六日間に互り實施された。炎天下八月、實に猛暑の最中のことであり、山中での勤務は相當辛苦を伴ふと思はれたが、村としては一番農閑な時期ではあり、青年の心身鍛錬にはもつて來いの季節であつたと云へよう、百十名の隊員は期間中總て同村廣東小學校に合宿し、最も規律を重んじ、日常座臥を軍隊的訓練を以て終始した。

一日の日課は午前四時起床によつて始まり、清掃、點呼の上、國旗掲揚を奉行し、宮城遙拜續いて訓話ありて同五時、朝食をなし、ラヂオ體操等朝の諸行事を終へて後出發準備を終る。六時半に校庭に集合、斧、鋸等を持つて整列、隊旗を先頭に行進ラツパの音も勇ましく堂々行進、青年の意氣は天を衝くの慨があつた。朝霧の立ちこめた深山へ突入、時に七時半、直ちに作業は開始される、朝風を裂く凜冽の響、作業開始のラツパが樹木を縫つて遠く飢する。見る／＼中に木が伐られる。運び出される、樹皮が剝がれる——まるで競争である。一人として働かずに居る者はない。丁、丁、鋭い斧の音、ギツン、ギツン、鈍い力強さをもつた鋸の音、ザ、ザ、ドサーツ、深い谷間に木の倒れる音、それ等の音が交錯し、欲して至で戦場のやうだ。斯くして眞剣な勤務が続けられた。

正午まで休憩一回、正午より一時まで晝食、一時—五時まで作業(休憩一回)、五時に作業を切上げ合宿へ歸所、國旗降納を行ひ、入浴、夕食の後七時半まで休憩、夜は修養講話、研究会、座談會等をなし、終日の行動を心靜かに反省する時間を持つ、午後九時遙拜の後點呼、就床と規律正しく禮儀を重んずる日々が続けられたのである。

實施期間中林業技手、青年學校職員は團員と共に寢食を共にして直接指導の任に當り、村長、林野委員も手に斧を持ち青年らの先頭に立つて作業に参加、身を以て激勵し、また玖珂郡青年團主事龜岡助一氏は主として修養方面を擔當して之も青年らと寢食を共にし、而も作業にも参加指導される等、指導者の地位にある人々の實踐躬行はよく青年を感激、奮起せしめるに充分であつた。

最初、本計畫をなすに當つて、時局下勞力不足の時ではあり、不平、非難の聲も起るであらう相當長期間の事でもあるから何らか事故の發生も覺悟せねばなるまいとせられてゐたが、それ等の心配は、實施と共に杞憂に過ぎなくなつてしまつた。燃える炎暑八月の空の下で、汗みづくに働き続ける青年の姿は實に眞摯そのものであつた。誰一人、何一つ不平を洩す者もない。皆喜び

勇んで此の尊い労働を分擔し、孜々として働くのであつた。父兄達もその成績を見て一驚を喫した程である。

参加隊員には悉く、團員手帳に、青年學校生徒には青年學校手帳に左の参加記念證印が押捺されて、此の尊い勤勞奉仕が永久に記念された。

昭和十三年八月十五日ヨリ八月廿日ニ至ル
六日間實施セル廣瀨村青年集團勤勞奉仕防
長愛國隊ニ参加セシコトヲ證ス

證印

本勤勞奉仕實施期間の最終日第六日目のことであつた。朝來時雨模様あさときり模様の空は遂に雨となり、各指導者協議の結果、雨中作業の困難を慮り且は雨具の用意もないこととして止むなく作業中止と決定した。處が青年達がどうしてもきかない。「彈丸の雨と降る中で皇國のため奮戦してゐる第一線將兵の事を思へば、時雨ぐらゐが何だ、最後の一日を中止する事は残念だ、雨具はなくともよい、斷然すぶ濡れになる覺悟で決行したい」と口々に絶叫して止まない。此の激しい熱情には全く指導者側も心をうたれた。こんなにも逞しい青年の意氣を感じたことはなかつた。そこで再び

協議の結果、この熱烈な青年の意氣を汲み、作業の困難を度外視して遂に非常識とも思へる雨中作業を決行する事となつた。もう山へたどりつくまでに全身びつしより濡れてしまつた。猛夏のことゝ幸ひ寒くはないが、山の樹々は水を含んで作業はとても困難である。併し青年達は却つて勇氣百倍、雨中の難作業を首尾よく豫定通り敢行、すべて完了し、宿舍へ歸つてすぶ濡れの姿で解散式を行ひ、天も裂けよと萬歳を絶叫した時は、全員感激の極致、涙を流し相擁して意義ある聖戦下の勤勞奉仕の完了を喜んだのであつた。

作業は村有造林（杉、扁柏）の除伐、間伐及び其の運搬作業で、最終日雨に祟られはしたが、指導者の熱意と團員の辛苦努力により、豫想外の成績を挙げ、その作業全面積は約十五町歩に亘り、山村に於ける銃後青年の意氣を示すに充分であつた。

此の第一回勤勞奉仕終了後、村當局よりその好成绩を激賞されると共に金五拾錢預け入れの産業組合通帳を記念品として團員に授與された。團では直ちに支部長會議を開き、これを絶好の機として各支部別に共同貯金を繼續することとし、貯金報國の一端を果すことによつて、勤勞奉仕は有終の美を齎すに至つた。

同村には手入れに急を要する村有林が他にも多くあるので、この青年集團勤勞奉仕によつて次々に始末をつけてゆくこととした。直ちに次の農閑期に於いて第二回勤勞奉仕が實施される筈であるが、この森林治水事業に對する勤勞奉仕は、彼等青年が村を背負つて立つ頃、恰度伐採期に入るが、その時には有力なる財源となつて表れ、若き日の尊い汗の美はしい結實に人々は快い微笑を投げることであらう。

開墾と農舎の建設

廣島縣沼隈郡山手村青年團

村と團のあらまし 山手村は廣島縣の東南端福山市の西一里の處にある。北半は山嶽地帯にして谷間に僅かばかりの耕地と、斜面ゆるやかな土地を開墾した耕地が有るのみであるが、南半は平坦なる耕地が廣く開け所謂山手沖をなしてゐる。村の中央を山陽道が貫通し、地理的には比較的めぐまれながら、定期交通機關の便がないため、交通運輸にまゝ不便を來す状態である。現在戸數三一二戸、人口一七六九人にして、耕地は田畑合せて農家一戸當り三町餘、山林五町餘を有してゐる。主要農産物は主として米、小麥、裸麥、桑其他にして副業としてクマズ(のとや)製作を業とし農閑期は殆んど全農家収入の最も大なるものとなつてゐる。

而して本青年團は七支部より成り、事務組織としては修養部、文藝部、實務部、體育部、娛樂

部の五部が設けられてゐる。青年團員は應召其の他軍需工業方面に進出し現在四十一名に減じてゐる。開墾作業や應召農家の勤勞奉仕や献穀田奉仕等は凡て實務部が中心となつてやつてゐるが、本團の實行體系は青年團指導者の指圖によつて、團長、部長及び委員が協議實行し、其の間緊密なる有機的統合連絡が圖られてゐる。

開墾作業計畫の概要

1、組織並開墾の目的

この開墾事業は前廣島縣知事の提唱によつて、紀元二千六百年を記念するために起された事業で昭和十三年九月十六日付を以て次のやうな指令によつて認可せられ、村當局の絶大な支持と援助によつて村有林を無償貸與せられ直ちに着手したのである。

指令

山手村青年團長井上直一殿

昭和十三年七月二十日付願沼隈郡山手村字大成三六九四番地ノ一森林開墾ノ件許可ス
但シ左記事項遵守スベシ

昭和十三年九月十六日

廣島縣知事 富田愛次郎

記

一、許可事項

一、施業面積 五反一畝二歩

一、開墾目的 畑

二、施業方法

一、畑面平坦ナル階段畑トナシ法面ハ芝付スベシ

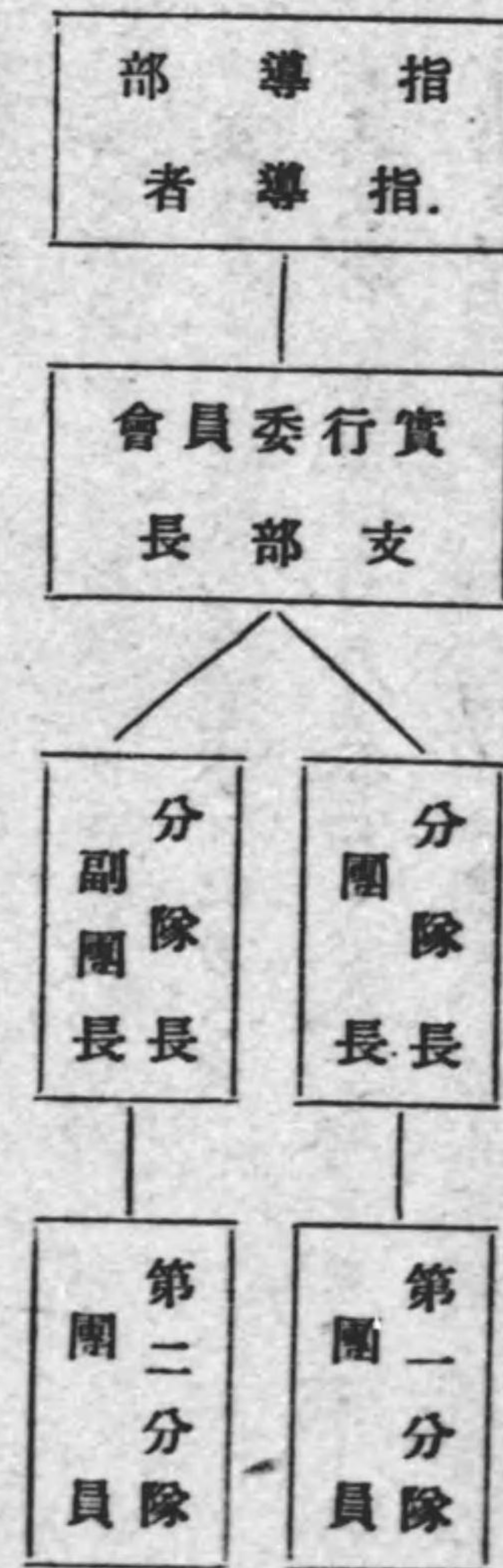
一、墓地ヨリ五間以内ハ開墾スベカラズ

三、施業期間 許可ノ日ヨリ昭和十五年三月末日マデトス

四、本書ヲ受領シタル時ハ直チニ箇所、許可事項、施業方法、許可年月日、施業期間、出願者住所氏名ヲ明記シタル木札を森林入口ノ見易キ箇所ニ建設スベシ

以上の如き指令に基いて先づ本事業を最も組織的に且つ統制ある指導の下に實施するため、支部毎に團員を業態別に二分し、其の一部一部を全團總め、第一分隊第二分隊に編成し、分隊長に

は團長、副團長が之に當り、其の上に指導部を設け主として青年團指導者が其の任に當る事になつてゐる。一ヶ月間の内、第一隊奉仕日、第二隊奉仕日、全體奉仕日とに分ち出席奉仕上の便宜を與へる様にしてゐる。編成組織體系は次の如くである。



2、開墾の方法

この開墾作業を通じて融和協力以て勤勞愛汗の精神を發揚し、皇國日本の青年とし特に思想健實にして、篤實なる青年となると同時に、開墾地に果樹を栽培することによつて基本財産蓄積の機運を醸成し、延ては果樹栽培智識の向上を圖らんとするものであつて、作業奉仕間常に其の目的に添ふべく細心の留意の下に實施されてゐる。其の作業の内譯は

種別	地積	坪當人員數	人員數	摘要
荒地起	六九反	一一五坪	二〇八〇人	男子青年團
地盤拵	六九反	一〇四坪	二〇〇〇人	女子青年團
表土扱	六九反	七三坪一	一二〇〇人	同
排水路	一七六間	〇、二一間	一二〇〇人	男子青年團
農道	二五八間	〇、二六間	一〇〇〇人	同
堰	一〇六間	〇、一八間	六〇〇人	同
計			八〇八〇人	

であつて勞働能力調査は一人一ヶ年二十日とし、男子青年團は六十一人、延人員二二二〇人とし女子青年團は四十一人、延人員八〇〇人として計畫されてゐるが、漸次團員數が減少し團員の一入當り負擔は次第に増加しつゝあるの状態であるが團員の非常な意氣によつて豫定通り進捗してゐる。作業計畫は以上の通りであるが奉仕日に於ける行事は次の如く、總て團體的訓練に重きが置かれ、規律正しく實施されてゐる。

奉仕日行事

- 一、學校ニ集合敬禮（午前七時）
- 一、東方遙拜、默禱（皇軍ニ武運長久）
- 一、國歌奉唱
- 一、令旨奉讀
- 一、團長又ハ副團長挨拶
- 一、指導者訓辭
- 一、行進（愛國行進曲ニヨツテ現場ニ向フ）
- 一、現場ニ國旗掲揚
- 一、指導者作業分擔指示及ビ注意
- 一、作業
- 一、晝食（正午ヨリ一時間）
- 一、指導者講話又ハ雜誌青年輪讀會（二時迄）

- 一、作業終了（午後五時三〇分）
- 一、國旗降下
- 一、學校ニ歸還
- 一、團長又ハ副團長挨拶
- 一、指導者講評
- 一、貴く生きん合唱
- 一、解散

3、現在までの成果

團員一致協力し意義ある紀元二千六百年を永久に記念すべく、毎月三回乃至四回の作業日を定め中二回乃至三回の努力奉仕をなし、村民一般が青年團に對する認識を改め青年ならこそその感を深むるに至つた。團員の献身的努力に依つて既に荒起しを終了し、其の大半は果樹栽植をなし、今後は整地、農道整理、砂溜池の水の流出場所構築等の作業が残され、許可期間内には全部完了の豫定となつてゐる。果樹は目下梅、枇杷等が栽植され、間作に甘藷其他の蔬菜を栽培してゐる

が、果樹園經營の如何について廣く村民の注視的となつてゐる。尙昭和十三年度に於ける團員の奉仕表は左の通りである。

種別	出席延人員	奉仕豫定人員	備考
男子青年團	七五九人	八五四人	但し團員減少に依るもの大なり
女子青年團	六二三人	五七四人	
計	一三八二人	一四二八人	

5、將來の計畫

昭和十五年三月末日迄に開墾を完了し、主として梅、枇杷、栗、桃等の栽培をなすべく其の經營は男子青年團、女子青年團、青年學校及び全體の試験地に區分し各々經營をなすべく計畫が進められてゐる。

農舎建築作業の概要

合理的なる農業經營を行ふためには完備せる農舎が必要である。殊に農産物の増産を圖るは刻下の急務であり、又之れが生産のため必要な自給肥料の増産を圖るは現下最も重要なことであ

る。こゝに鑑み本團並本村青年學校に於て農舎の建設を企圖したのであつた。

然し乍ら之が建設には多くの經費を必要とする。實施に當つてその經費を如何にするか——意の如くならず青年達は非常に苦慮されたのであつた。さりとて本村農業教育上將又本村農業開發上農舎の建設は緊急必要なるものである。縣に對し實情を具申し、施設費補助を申請した處、幸ひ貳百五拾圓補助の指令を受け一同は非常に喜び直ちに建設の運びをなさんとしたのであつたが、物價騰貴の爲め設計をなせる様な農舎の建設には、まだ一經費不足、其の半にも達せざるの状態にて、種々苦慮の上、青年學校生徒によつて、組織せらるゝ自彊會の役員に此の旨申出で團員及び生徒、職人の勞力奉仕を慫慂した處、率先奉仕の申出を受け、指導者である青年學校専任教員が責任者となり、設計其他萬般の準備及び指導をなし、直ちに着手、青年學校職業科の實習時間及び科外勞力奉仕によつて、生徒も團員も一體となつて、一人に對して一般人工程を充當し、材料運搬には小學生徒の勞力奉仕も有り總て設計に基き工事が進められたのであつた農舎の設計略圖は次の如きである。

兎 舎	堆 肥 舎	農 具 舎	收 納 舎
--------	-------------	-------------	-------------

尙勞力奉仕狀況は

種 別	人 員	就 勞 延 時 間
大 工	七 人	五 五 〇 時
左 官	四 人	二 五 〇 時
一 般	四 〇 人	一 二 〇 〇 時
計	五 一 人	二 〇 〇 〇 時

であつて大工中多きは、百六十時間を奉仕し、仕事の都合によつては殆んど一日二十四時間中、

満二十四時間働きた者もあり、又一般團員中にも百三時間の奉仕をなせる如き熱心な者もあつた。

次に今後に於ける農舎の經營であるが、農舎の活用如何は今後斯の教育上重要な役割を持つものであり、この農舎をして眞に模範的經營をなし一般村民の經營指導の資とせんとしてゐる。特にこの施設に關しては一般部落民の注視の的となつて居り、その實績の如何は村民に及ぼす影響大なるものがあるであらう。

尙今後に於て更に團員の一致團結と熱烈な勤勞奉仕によつて、温室建築をもなさんと、指導者に於いて、設計其他準備中であり一同張切つてゐる。

昭和十五年五月廿日印刷
昭和十五年五月廿五日發行

【定價五拾錢】

編者

大日本青年團指導部農漁課

東京市四谷區明治神宮外苑霞ヶ丘口
日本青年館

熊谷辰治郎

東京市淺草區小島町二丁目十五番地

印刷所
三三印刷所

東京市四谷區明治神宮外苑霞ヶ丘口

發行所
財團日本青年館

電話青山四二六〇—四番
振替東京六〇七七八番

團年青く輝に勞動

製本控

279.5圓

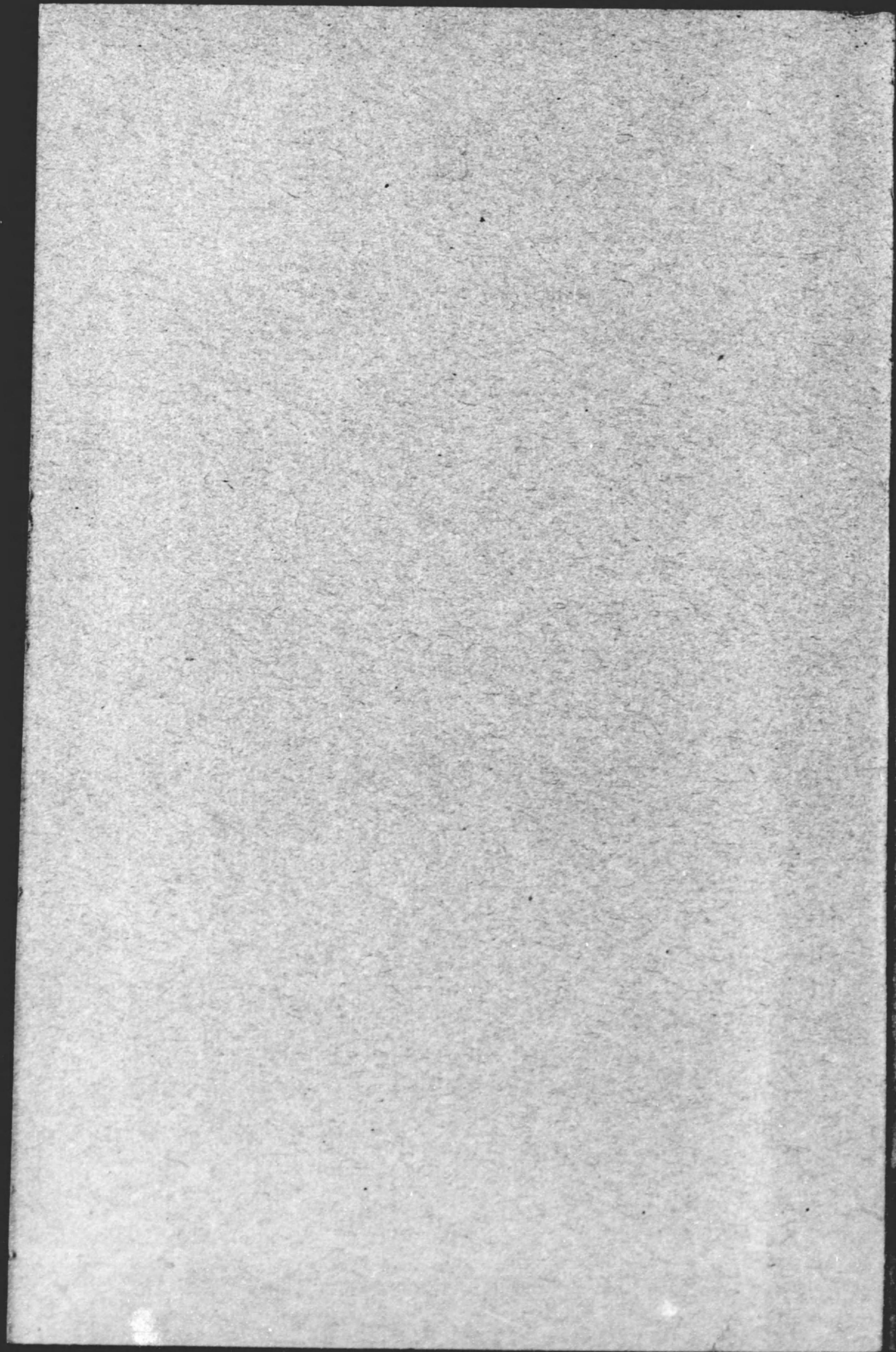
176號

年 月 日

勤勞に輝く青年團
大日本青年團指導部農漁課編

備考

79.5
176



5